

松前達郎

Tatsuro Matsumae

学校法人東海大学 総長

希望を
星につなげ

我が人生



希望を
星になげ

我が人生

松前達郎

Tatsuro Matsumae

学校法人東海大学 総長

はじめに

私の父、松前重義まつまえしげよしは官僚であり、工学博士であり、国会議員である。そして、学校法人東海大学の創立者である。長男の私は、官僚にはならなかったが、研究者の道を歩み、東海大学に転じて若者の教育に生涯を捧げ、国際交流にも尽力してきた。その傍ら、参議院議員を4期24年間務め、科学技術の振興推進のために科学技術基本法や環境基本法の制定、電信電話事業の改革などの法案成立に力を注いできた。

議員を辞してからは学務によりいっそう精励して、亡き父の遺志を継いで学長、総長になり、90歳を超えたいまでも学校法人東海大学とともにある。「昭和の怪物」と呼ばれ、さまざまな分野で活躍した外向的な父と違って、私はどちらかといえば内向型で、派手な行動は苦手なほうだが、豊かな日本を担い、世界平和を希求する人材を育てる熱意は父と変わらない。友愛で世界をつなげ、教育で若者たちをつないできた。本学園を思う気持ちも

父と同様、強くて深い。

本書では、私の来し方も書いてある。優しい父母に守られて育った幼少期、戦中・戦後の動乱のなかで過ごした少年、青年時代を経て、父と同じく東北帝国大学の工学部に進み、金属工学を専攻した。その後、現在のNITTの前身である日本電信電話公社の研究所に入って10年間、金属材料などの知見を生かして急激に進化する電信電話業務の改善を図るとともに、自らの研究にも力を注いできた。工学博士も取得している。充実の日々だった。

そして、東海大学の教壇に立ち、若者たちとともに学ぶ醍醐味も実感してきた。学務には苦労も多かったが、日本で、そして世界で活躍できる有為な人材を育てるという建学の精神の下、周囲のサポートもあって学園の充実や改革を実現することができた。

学校法人東海大学は2022年（令和4年）で建学80周年を迎えた。東京・武蔵野の自宅に父がつくった小さな私塾、「望星学塾」を母胎とする学園はいま、学生・生徒等数4万5000人を超える大きな教育機関へと成長した。その利点を生かして、さらなる成長と進化を目指したい。「変えるべきものは変え、変えてはいけないものは堅持する」という父、重義の言葉どおりに建学の志を守って、建学当初の手づくりの小さな学園のよさも

しつかり継承しつつ、新しい時代に向けた改革と挑戦を続けていくべきだと考えている。

本書のタイトル『希望を星につなげ』は、東海大学の建学の母胎である「望星学塾」から取っている。これから本書でくわしく紹介することになる、デンマークの国民高等学校（農村青年を対象とした全寮制の学校）を模範にした私塾である。

「望星」という名称のルーツは、米国の思想家で詩人のラルフ・エマソンの言葉「Hitch your wagon to a star（汝の車^{みんて}を星につなげ）」にあり、父・重義は「車」を「希望」に変えて、「望星学塾」に掲げたのである。

さあ、私の半生と重ね合わせながら、わが愛する学園の過去、現在、未来について綴っていくことにしよう。

学校法人東海大学建学80周年記念日に

2022年11月1日

松前達郎

目次

はじめに 1

第1章

父の背中

生まれは長崎 11

いたずらっ子 15

戦時下の高校生活 18

寮生活 20

勤労働員 22

第2章

戦争と平和と

父の懲罰召集 27

戦地の父 31

終戦 34

第3章

行動する科学者として

東北帝大入学 37
よく学び、よく遊べ 41

電気通信研究所 47

電通研の仕事 50

東海大学の教員に 53

望星学塾——東海大学の源流 57

海洋学部 63

海外研修航海 66

第4章

政界の24年

政界へ 73

政治信条 76

科学技術基本法 79

日本電信電話株式会社法 81

日本社会党の盛衰 82

議員を退く 86

第5章 国際交流、半世紀

- 交流から多くを学ぶ 91
世界一周研修航海 95
ウラジオストク入港 99
ロシアとの交流 102
デンマーク校の再生 105
原点に戻る 108
ハワイ東海インターナショナルカレッジ 110
ヨーロッパ学術センターの創設 113
アジア・環太平洋学長研究所長会議 115

第6章 東海大学とともに

- 医学部の創設 121
熊本に農学部 125
情報技術センター 129
ル・マン耐久レース 131
ソーラーカー開発——実践的な工学教育のチャレンジ 133

終章

学園の成長こそ、我が誇り

157

F M東海の開局 137

スポーツ教育 140

男子柔道 142

女子柔道と高校野球 145

学部再編——カレッジ構想 148

新学部について 151

道の途中 155

現代文明論 159

父と母を送る 162

これから 165

世界の平和を担う若者を育む 167

本書の発刊にあたって 172

年譜 174

第1章

父の背中



生まれは長崎

私は、元号が昭和に替わって2年目の1927年（昭和2年）2月19日、長崎市で生まれた。父の重義が逓信省（現日本郵政グループ、NTTグループ、総務省）から、通信技師として長崎の電話局に異動を命じられていたときだ。しかし、その後、数カ月で本省に戻ったため、私は東京・杉並の阿佐谷と天沼で育った。だから長崎の記憶はまったくない。生まれた場所のことが知りたくなって、東海大学卒業生のお世話で古い住所を頼りに訪ねたことがある。父や母から聞いていた風景やたたずまいの面影はなかったが、不思議に懐かしく、うれしかった。

父は、いまの熊本県上益城郡嘉島町に生まれた。熊本藩士の家柄で、祖父の集義しゅうぎは嘉島町に合併する前の大島村の村長を務めた。父は東北帝国大学工学部を出て逓信省に入省した。

母の信子は鹿児島出身で、島津藩の藩医を務めた家に生まれた。旧姓は森。祖父の森三木も医者だった。武家の血を色濃く引く人だったらしい。母は膝を崩して座る祖父の姿を見たことがないという。祖父は、日本の病院で初めてレントゲンを診断に使った人だ。世界的な細菌学者の北里柴三郎先生の門下で、北里先生が自宅に来訪されたことがあると母に聞いた。

父が逋信省に奉職して1年が過ぎたころ、秘書課長に見合いを勧められた。その相手が桑山鉄男逋信次官の奥様の妹・信子だった。そのとき父は25歳、母は23歳。両親ともに「平凡な見合い結婚だった」と話していたが、2人は深く強い信頼で結ばれていて、風雪の

戦前、戦中、戦後を懸命に生き抜いてきた。

信頼の基盤になったのはキリスト教だった。母は鹿児島の第二高等女学校の生徒のときにキリスト教会へ通い、生涯カトリックに帰依していた。父は同じ下宿の友人の紹介で、キリスト教思想家で文学者の内村鑑三先生が新宿の柏木（現在の新



内村鑑三
(今井館教友会所蔵)



今井館聖書講堂での聖書研究会、教壇に立つ内村鑑三
(今井館教友会所蔵)

宿区北新宿3丁目付近)で開いていた聖書研究会に通っていた。その思想と行動の根底には、内村先生からの薫陶によるキリスト教精神があった。結婚してからは夫婦で内村先生の研究会に通っている。

長崎の住まいは、浦上川沿いの少し高い場所にあったという。私が生まれて間もないころ、大きな水害が起きた。ふだんは流れが細い浦上川に濁流が押し寄せてきて、わが家も危なくなった。父は仕事で不在、母は私を抱っこして川を渡って避難した。近くの役場で働いている女性たちも誘導して逃げたという。母はその少し前に海辺で足に怪我をしていて、濁流を渡ったのがもとで傷が化膿して、



(達郎70日)
泣き止まず困ったところ
はまじまじ
困ったところ

「達郎 70 日目、泣き止まず困ったところ」と母・松前信子

しばらく入院したそうさ。献身的で優しい人だった。

父は超多忙で、私が寝るまで帰ってこない。朝起きると、もういなかった。でも、子煩悩だったそうさ。母から聞いた話では、長崎にいたころ、東京出張の折に赤ん坊の私にとっても高価な乳母車を買って、ニコニコしながら長崎まで持って帰ってきたと聞いている。

私は長男だ。弟が2人いる。4つ下の紀男のりお、さらに4つ下の仰あきである。紀男は東京藝術大学音楽学部楽理科で音楽を学んで音楽教育に携わり、仰はNHKの技術研究者になり、のちに衛星放送の仕事をした。後年、ともに学園の運営に参画した2人は、頼れる存在だった

た。父も母も、そして弟2人もすでにこの世の人ではない。

いたずらっ子

誰でもそうだろうが、幼い時分のまとまった記憶はなく、断片的な風景が頭に残っているだけだ。いまの東京・杉並区天沼の自宅の近くに陸軍電信隊の演習場があって、黄色い電線を巻き取ったリールを背負って動き回っている通信兵の姿を覚えている。

自転車の練習も記憶にある。大人の自転車を使った、いわゆる三角乗りだ。ある日、父が漕ぐ自転車の後ろに乗っていて、父と一緒に溝ぼとけに落ちたことがあった。父にも私にも怪我はなかったと思う。近くの天沼幼稚園に通っていたころ、友達とふざけ合っていて突き飛ばされて、はずみで焚き火のなかに突っ込み、大やけどをしたこともある。

学区の公立小学校に入学した。やんちゃないたずらっ子だった。小さくちぎったクレヨンクレヨンを教壇の担任の先生に投げつけるのが面白かった。辟易した先生が私の席を教室の一番



杉並区天沼の自宅門前にて母と弟と

が3年生になるとき、突然、父から「達郎、転校だよ」と言い渡された。学校の意向だったのか、両親が考えたことなのかはよくわからない。しかし、いたずらのことは父も何も言わなかった。

転校先は、武蔵野にあった私立武蔵野学園小学校（現むさしの学園小学校、東京都府中市）だった。思い出してみると、実に自由な校風の学校だった。生徒を鋳型にはめて標準化せず、子どもの個性を自由に伸ばすのをモットーにしていたのだろう。勉強にもやかま

後ろに替えたが、そこから投げることが余計に楽しい。そういう幼稚ないたずらを繰り返していたので、学校から母にたびたび注意がきたらしいが、叱られた覚えはない。

小学1、2年生のころ、逋信省にいた父は約1年間、ヨーロッパに留学兼出張していた。帰国して私



むさしの学園の創立者3人。中央が初代校長で望星学塾顧問の佐藤藤太郎氏

しくなかつたので、ガリ勉の子どもはいなかつた。転校したばかりのころは軽いいじめを受けたものの、全然へこたれず、いつの間にかガキ大将のような存在になっていた。緑豊かな武蔵野で伸び伸びと過ごした幸せな少年時代だった。

子ども時代の最も鮮明な記憶は父の外国土産である。たくさんの荷物が届いたのは帰国しておよそ1年が過ぎたころだった。船便だったにしても、ずいぶん遅い。私の背丈より高い木箱に家族への土産が詰め込まれていた。そのときもらったタイプライターと写真機

を私はずっと後まで使っていた。母には美しいレース編みの洋服を買ってきた。

新しい物好きなお父は16ミリの撮影機と新し物好きなお父は16ミリの撮影機と
映写機、フィルム編集機を携えて欧州を
回ってきた。映像にはナチス政権が誕生
したばかりのドイツのヒトラー・ユー
ゲント（青少年組織）の整然とした行進
の様子が写っていた。夜霧にけむるロン

ドンの街もあった。スイスのユングフラウヨッホでは、父が雪のなかでうれしそうにデンマーク体操をしていた。初めて見る外国の風景にわくわくしながら見入ったのをよく覚えてる。

海外視察で父が最も感銘を受けたのがデンマークだった。私たち3兄弟は毎朝、父が覚えてきたデンマーク体操をやらされた。

政府に批判的な青年将校らが蜂起した1936年（昭和11年）2月26日の二・二六事件も覚えてる。役所で通信の責任者だった父は非常事態に忙殺されて、その晩、家に帰れず、とても不安だった。翌1937年（昭和12年）に日中戦争の南京陥落を祝って町の広場で開かれた提灯行列も覚えている。「激動の昭和」が始まろうとしていた。

戦時下の高校生活

中学への進学にあたって、中高一貫の旧制武蔵高等学校尋常科（中学校に相当）を受験

することに決めていた。いまもそうだが、そのころから武蔵は文武両道の難関校として定評があった。卒業生のほぼ全員が国立大学に進んでいた。

小学校は、勉強のことをあまりうるさく言わない、自由で、のんびりした学校だったし、両親から「勉強しなさい」と厳しく言われた覚えもない。だから、受験勉強にはかなりの頑張りが必要だった。私の学力を心配した父が、通信技師の谷村功たにむらひさしさんに家庭教師を頼み、苦手な数学を中心に教わった。

われながらよく勉強して、受験の日を迎えた。終わって自信はなかったが、かといってだめだな、とも思わなかった。父は谷村さんに頼んで入試問題を取り寄せ、私を横に座らせて、私の答えを聞きながら自分でも解いていった。その表情がだんだんと険しくなってきた、とうとうあきらめたように言った。「達郎、だめだな」。

落ちたたと覚悟はしていたが、念のために発表を見に行くと、なんと合格だった。谷村さんは「お父様の答えが間違っていたのですよ。私は合格だと思っていましたよ」と笑顔で話した。

入学すると、予想どおり勉強は厳しかった。しかし、広いグラウンドと体育館、プール

やテニススコートもあって運動も奨励されていた。野球、テニス、水泳、卓球、水球、サッカー、円盤投げなど、若いエネルギーをぶつけるようにいろいろなスポーツをした。夏は軽井沢で高原学校、冬は赤倉でスキーをした。

学友たちとスポーツをするのは本当に楽しかった。勉強も頑張ったが、中間試験のときに風邪をひいて英語と数学の試験を受けられなかった。私は留年することを決めて後期試験をパスした。武蔵では毎年、学年の1割くらいの生徒が落第して留年する。留年したのは私を入れて4人だった。

寮生活

2度目の1年生からは寮に入ることにした。武蔵野の自宅から練馬区江古田の学校まで1時間半もかかったので寮生活は時間が節約できる。「慎独寮」という。上級生と下級生と一緒に暮らす。1部屋だいたい5人である。

1階に各自の机と本棚があつて、2階の畳敷きの部屋が寝室になつている。

戦争の影が忍び寄ってきていた。戦時下の高校生活は真つ暗だったかというところ、そうでもない。楽しいこともたくさんあつた。旧制の高等科で理科系に進んで勉強は非常に厳しかったが、その合間を縫うようにして、けっこう遊んだ。

寮生活も和気あいあいとして愉快だった。そのころの仲間たちは政界や財界、官界、そして学界に進んで活躍した。友情は社会に出てからも続き、ずいぶん助けられた。

ただひとつの悩みは空腹である。勉強に運動に遊びに若いエネルギーを傾けたのはいいが、腹に力が入らない。私は寮で食堂係になつた。賄いまかいの女性がつくってくれる食事を食堂に運び、食器を丁寧に整えて配膳する。実に美しく食卓を整えたのはいいが、何を食べたかはほとんど覚えていない。とにかく、おいしいご馳走を食べた記憶はまったくなくない。わずかに覚えているのはトウモロコシ粉のコツペパンと、具のほとんど入っていないカレーライスぐらいのものである。

武蔵恒例の研究発表会が懐かしい。生徒それぞれが自分の興味のあるテーマを選んで研究発表を發表する。中学1年生のとき、私は「雷」をテーマに發表した。学友たちが鋭い質

間を浴びせてくる。それらを何とか乗り越えるのがスリリングで実に楽しかった。

勤労働員

1943年（昭和18年）から東条英機内閣が学徒動員を命じて、まず文科系の学生の召集が始まった。理科系の学生は当面猶予されたが、東京の明治神宮外苑競技場で出陣学徒壮行会（同年10月開催）をスタンドから見つめた。「私も早晚、戦地に駆り出されるのだから」と思った。不安はあったが、やむなしという気持ちだった。学徒勤労働員も本格的になって私たちも授業の合間にあちらこちらに行かされた。やがて授業そっちのけで勤労働員や軍事教練が頻繁になっていった。

東京・板橋の金属加工工場が面白かった。アルミなどの金属を圧延したり、溶かしてなめしたり、たたいたりして硬度を上げて加工する。戦闘機のプロペラや船舶のシャフトをはじめとする軍需品をつくるのだ。暑い工場のなかで汗だくで金属を運んだりしながら、

熟練の工員さんたちの動きを興味深く眺めていた。私はだんだんと金属加工と金属そのものに惹かれていった。

埼玉県熊谷市の農家にも手伝いに行った。田や畑で使う動力の主役は牛である。実に頑固で偏屈な動物で、押しても引いても、ちつとも動こうとしない。難渋していると、農家の子どもが楽々と自在に動かすのにびっくりした。サツマイモやネギやカボチャの収穫は楽しかった。昼飯の白いご飯が最高のご馳走である。何しろ腹ペコ。みんなすごい勢いで腹いっぱい食べた。

富士山の裾野で陸軍の軍事演習に参加したこともある。いろいろな学校から大勢の生徒たちが参加するのだが、御殿場駅から演習場まで3時間もかけてクラスごとに行進する。私はクラスで2番目に背が高い。それが災いして、最も損な役回りになってしまった。身長が高い順に隊列を組んで行進するのだが、先頭は連隊旗を持ち、3番目は弾薬を持つ。旗は軽いし、弾薬を入れる箱は演習だから空っぽ。それなのに2番目の私は、重い三八式歩兵銃を持たされる。肩がじんじんしびれるくらい、ずっしりと重い。

疲労困憊で到着した。演習は「くだらない」の一語に尽きた。生徒たちを班に分けて、敵、

味方で攻防戦のまね事をする。われわれの班は敵側、つまり連合国軍で、日本軍にやられる役回りである。突撃してくる相手を迎撃するのだが、最後はやっつけられて「やられたあゝ」と叫んで倒れて演習は終わる。銃は本物でも弾が入っていない。子どもの戦争ごっこよりも幼稚だった。

そこで私たちは一計を案じた。丘の陰に隠れて日本軍を迎撃する奇襲作戦に出たのだ。急襲に大慌てした相手側の生徒たちを押さえつけて降参させた。「勝った、勝った」と喜んでいると、指導教官の大佐がものすごい形相で駆けてきて大声で怒鳴った。「ばか者、おまえらの役目は全滅することなんだ。勝手なまねするな！」

こんな演習、戦地では役に立つはずがない。そういう重苦しい日々のなか、松前家にとんでもない災難が舞い込んだ。

戦争と平和と



も42歳だ。そんな父が二等兵として戦地に駆り出されるとは。軍国主義を批判した人物に對する懲罰以外の何物でもない。17歳の私も「理不尽だ」と憤慨した。

父が1941年（昭和16年）12月3日に工務局長に就いて5日後に日米開戦、太平洋戦争が始まった。通信事業関連の工事や技術管理を統括するのが工務局長の職務である。膨大な量の資材や機械を調達する統括責任者だから、国内の資源量や生産量などの膨大なすべてのデータを冷静に分析して把握することも不可欠で、職務に非常に忠実な父は仕事に邁進していた。

もともと工務畑で鉱工業をはじめとする産業資材の生産能力、石油などエネルギー備蓄量、工業製品の生産量、通信、運輸の状況などを冷静沈着に把握、分析して「日本の実力」を熟知していた。欧米諸国を長期視察して列国の底力を知っている父は、かねてから戦争に反対だった。

そんな折、戦争拡大に懐疑的な海軍軍務局から内々に「日米の国力比較調査」の依頼が舞い込んだ。父は、法科出身者ばかりが幅を利かせて理科系や工学系の人間は冷遇される官僚の世界を変えようと、各省庁の技術系の官僚たちと「七省技術者協議会」という集ま



1939年2月、日本技術協会と七省技術者協議会主催の第2回技術者大会で、開会の辞を述べる父・松前重義

りをつくって勉強会を開き、熱心に学び、議論してきた。そのメンバーを中心に調査を始めた。

国内の主要な重工業や軍需産業の企業を手分けして回った。予断を排して欧州のデータも含めて、でき得る限り客観的に広汎かつ綿密に調べて得られた結論は衝撃的だった。

「米国と我国生産戦力並びに作戦消耗量の比較を試みるならば日米生産力の比は10倍対1の著しい開きを有する」と父の調査にあったとおり、粗鋼生産、電力生産量、

鋼材も石油も米国に比べて圧倒的に少ないことがわかった。日米間のこうした「基礎体力」の大きな格差は、戦争遂行に必要な戦力や装備に致命的に響く。たとえば、日本が現有する船舶の総量を、米国はわずか1年間でつくってしまうと推論できた。

父は米国デトロイトでフォードの自動車工場を視察したことがあって、オートメーションを駆使した効率生産に驚嘆した話を私もたびたび聞かされていた。そういう知見も報告に盛り込んでいる。

軍部が発表する情報には虚偽が目立ち、戦況が日に日に悪化するなか、好戦的な精神を鼓舞する宣伝文句ばかりが流布されて、冷静で論理的な議論は弾圧された。

「国力が違いすぎるから戦争は必ず負ける。早く終わらせるべき」。報告書の作成にあたった面々はこの結果をまとめて天皇陛下に直訴する戦略を立てたが、さすがにできなかったという。

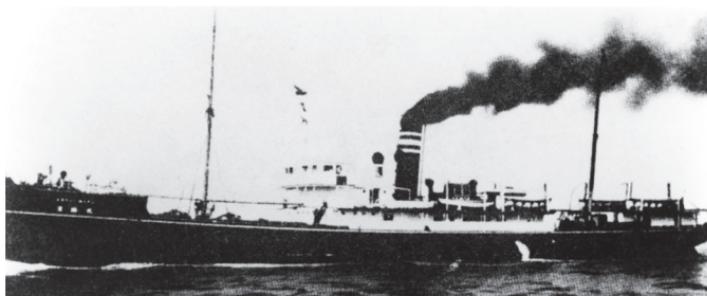
東条内閣にとって、この報告は打撃だった。父は懲罰召集になった。父はふるさとの熊本の本隊に入隊して福岡の門司港から船で出発した。私たちには行き先がわからなかったが、激戦地に行かされるという噂がもつぱらだった。

私は母に「母さん、父さんは大丈夫だよ」と励ました。弟2人はまだ中学生と小学生。私は内心、とても不安だった。だが、母は気丈で強かった。

戦地の父

私たち留守家族には、父の行き先は南方戦線というだけで具体的な出征地は知らされていなかった。南方、つまり太平洋の南アジアの国々である。玉砕や転進という名の撤退情報が漏れ伝わってくる激戦地だ。心配と不安は募るばかりだった。長男の私は「家族をしっかりと支えて頑張ろう」と強く心に誓ったものの、不安で頼りない気持ちの日々が始まった。

しばらく経ってから聞いた話では、父が門司港で乗せられたのは「淡路丸」というわずかに千トン足らずの荷物船だったという。だが、それが幸いした。日本の沿岸はすでに制海権を失っていて、大型の輸送船は米軍の魚雷や爆雷攻撃に次々に沈められていたが、淡路



淡路丸

丸は、おんぼろ船だったためか、標的にされずに辛くも無事だった。台湾の基隆キールンに着いて給油したのち、「浦戸丸」に乗り換えてフィリピンに向かうはずが、出航の直前にエンジントラブルが発生して足止めされた。そのとき定刻に出航した別の船は、潜水艦の餌食になって沈んだそうだ。

フィリピンで父は最前線で従軍することはなかった。南方軍総司令部参謀だった陸軍中佐、戸村盛雄とむらもりおさんをはじめ、軍の人たちに庇護されて参謀付きのような職務に就き、南方の産業調査などを命じられ、やがて、いまのベトナムのホーチミンに赴任した。すでに敗色濃厚だった。戦争遂行に批判的で父の懲罰召集に憤っている軍人たちも少なからずいたようだ。もちろんつらい目、ひどい目にも遭っただろう。海に沈み、戦闘に斃たれた方々を思うと胸が痛むが、父は強運だった。

もうひとつ恵まれていたのは、現地のシンバの人たちや、視察や慰問に赴いた父の友人、知人たちの協力で、手紙のやり取りができたことだった。出征した最初のうちは現地の情報が多すぎてなくて、私たち家族は心配や不安にさいなまれたが、次第に戦地の父の様子がわかってきて、大きな安心材料になった。

家族思いの父は実にまめに手紙をくれた。出征先での消息がくわしくわかったので非常に心強かった。母もよく手紙を出して私たち兄弟3人の元気な様子を伝え、銃後の守りに懸命に明け暮れた様子を丁寧に綴っている。離れていても夫婦の絆はよりいっそう深まったと思う。

このころの母の姿を思い出すと胸が熱くなる。近所に畑を借りて、サツマイモやトウモロコシ、麦、豆を栽培した。決して贅沢ではないが、飢えることはなかった。私たちを元気に励まして、いつも明るく気丈に頑張ってくれていた。

私たち一家は疎開をしなかった。空襲はますますひどくなった。武蔵野の自宅の4〜5キロメートル北に中島飛行機の軍需工場があったため、そこを標的にB29（米国の大型戦略爆撃機）やグラマン（戦闘機）の編隊が襲いかかり、家のすぐ近くにも爆弾や焼夷弾を

落としていく。私が家長気取りで自宅の2階の物干しで敵機を偵察していると、母に「達郎、早く防空壕に入りなさい」と叱られた。勤労動員が休みの日に、通っていた工場が空襲に遭い、みんなで防空壕に避難したが、そこが爆弾の直撃を受けたという。全員が亡くなったと聞いた。目の前が真っ暗になった。

手足がばらばらになった遺体や黒焦げの遺体を積んだトラックが走っているのをしばしば見た。もう恐怖心はなくなっていた。「僕もそのうち死ぬのだろうな」と思っていた。

終戦

天皇陛下の玉音放送は板橋の金属加工工場の庭で聞いた。ラジオから流れてくる切れ切れのお言葉から「戦争が終わったんだ」と思った。だが、そのときの感情は不思議に何も記憶にない。悔しかったのか、悲しかったのか、ほっとしたのか、心のなかに渦巻いたはずの感慨がきれいさっぱり消え去っている。

「ミステリアスだな」。それが実感だ。1945年（昭和20年）8月15日、その日、私は勤労員が休みだったように思うのだが、なぜ板橋まで出かけて行ったのか。玉音放送が終わったあと、どうやって家に戻ったのか、懲罰召集から無事に帰還した父や母や弟2人と交わしたはずの言葉や様子もまったく覚えていない。18歳の私はただ「何だか尻切れとんぼだな」と思っただけだった。

終戦になっても、学校の授業はなかなか再開しなかった。日本中が混沌と空白のなかにあった。振り返ってみれば何とも奇妙な時期だった。それでも日が経つにつれて静かに開放感がわいてきた。

だが、松前家の苦難は続いていた。戦地から戻った父は終戦間際の1945年（昭和20年）8月に請われて運輸通信省通信院から名称が変わった逓信院の総裁に就いたが、終戦から間もなく公職追放になった。戦争の遂行に反対して懲罰召集を命じられて二等兵として出兵した父である。逓信院総裁という政府の要職にいたというだけでGHQ（連合国最高司令官総司令部）に機械的に追放を命じられたとしか考えられない。これから日本の戦後復興に尽力しようと意気込んでいた父は憤慨していた。

一家の収入は途絶えてしまった。少しでも家計を助けようと、私はアルバイトを始めた。武蔵高校の友人と2人で東京・八重洲のビルにあるGHQのオフィスで米軍の高周波無線機や超短波送信機などの製作や修理を手伝った。機械いじり、とりわけ通信機器を組み立てるのが好きだから作業は面白かった。目を見張ったのが米国製の機器の性能の高さ。「戦争に負けるのは当然だよな」と実感した。

謝礼は現金ではなく、ほとんどが現物支給だった。ある日、固形の小さな塊がいくつか入った箱をもらった。箱にはアルファベットで「スープ」と書いてある。何しろ、いつも腹が減っている。家に持ち帰って湯で溶いて飲むなんて、まどろっこしい。東京駅に向かう薄暗い舗道でびりびりと包み紙を破き、中身を取り出してかじりはじめた。濃厚な旨さを頭に描いて食べはじめたが、ひどく苦い。「まずいスープだなあ」と思ったが、我慢しているうちに口の端から泡が出てきて、ようやく気づいた。「スープ」ではなく「ソープ（石鹼）」だった。泣きたくなかった。

時間だけはたっぷりあった。九段や四谷などの、焼け残ったおんぼろビルや露店で壊れたラジオや通信機の部品を買うのが楽しみだった。GHQの放出物資も売っていた。値段

は高かったけれど、小遣いを工面して買い集めてラジオや通信機を組み立てた。テレビ放送はもちろん始まっていないが、テレビ受像機をつくったこともある。楽しくて貴重な体験だった。日米の性能格差をあらためて現物で確認できた。国産の部品は金属素材が劣悪で機器の信頼性に乏しいのである。

新宿や渋谷の盛り場で映画や芝居を見た。小演劇も見た。そういう生活をしながら、いつも頭に浮かんでくるのは「運よく生き残ったんだ」との思いだった。私は理科系なので召集はぎりぎりで免れた。出征して戦死した同世代の人たちのことを考えると「無為に過ごせないぞ」と思い直した。まずは大学の受験勉強を必死にやるんだと決意した。

東北帝大入学

1947年（昭和22年）4月、東北帝国大学（同年10月東北大学に改称）の工学部金属工学科に入学した。20歳だった。父、重義と同じ大学、同じ学部である。旧制の東京工業

大学の1次試験を通っていたが、父の助言もあつて志望大学を変えた。

金属材料は地味な分野だが、「金属材料が科学技術のすべてを支配する時代が必ずやってくる」というのが父の持論だった。オール国産で長距離通信を大きく進化させた「無装荷ケーブル長距離通信方式」を苦勞して開発した経験から、父は半導体などに使う日本製の金属材料の品質、信頼性に難があると痛感していた。私もGHQのアルバイトの経験などを通して、「金属材料の性能向上が電子機器や通信機器の進化の決め手になる」と実感していた。

「日本を科学技術創造立国にするには、技術の総合化、システム化が不可欠だ」。これも父の持論である。「研究と開発のあいだをつなぐ科学技術者を目指そう。広い視野と知見を身に付けよう」と私は奮い立っていた。

父は東北帝大に強い思いがあつた。エレクトロニクスの発展の基盤になる金属材料学を熱心に学んでいたわけだが、指導教官から常々「日本の科学技術は遅れていて、高度な技術を用いたものは欧米からの輸入品だ。このままでは日本の将来はない」と言われてきた。父は、それを胸に刻んで科学技術の振興に半生を捧げてきたのだ。

東北帝大の金属工学科には、金属工学の世界的権威、本多光太郎先生がおられた。のちに「ミスター半導体」と呼ばれ、東北大学総長になられた西澤潤一にしざわじゅんいちさんは2学年上だった。

杜もりの都、仙台には戦災の爪痕が残っていた。商店街はバラックだらけ、道には砂埃が舞い立っていた。まるで牛のように頭を振りながらゆっくりと走る路面電車、亜炭を山のように積んだ荷馬車。道行く人々の会話を耳にすると異国に來たように感じた。北風の冷たさに驚いた。蛇行して街を流れる広瀬川は澄んでいた。

金属材料学はやはり地味だった。X線解析装置や金属顕微鏡、電気抵抗測定装置を使って主に非鉄金属の特性を調べるのが最も大事な作業だった。電気炉で溶かした金属を試験管に取って詳細に分析する。理科系は講義が多いうえに実験も頻繁にある。遊ぶ暇はないはずなのに実によく遊んだ。「いい技術者になるぞ」と意気軒昂だったし、金属材料学の奥深い魅力も徐々にわかってきたが、何しろ青春まったただなかである。さぼれる講義は一生懸命にさぼった。

ソーシャルダンス（社交ダンス）が流行り、街にはダンスホールが増えてきていた。ジャズも人気だった。しかし、私は軟派な遊びには興味がない。第一、金がなかった。



東北帝国大学時代、野球に興じていたころ

まず熱中したのが野球。同好会のようなものだが野球部に入った。守備位置はファーストだ。字を書くのは右手だけれど、スポーツは左利きである。

若き日の思い出として、いまもそのころのユニフォーム姿の写真を総長室に飾ってある。「立派なユニフォームで

すね。お父様からの贈り物ですか」とよく聞かれるが、当時の父は、戦争で瀕死の状態にあった東海大学を再建するために金策に東奔西走していて息子のユニフォームのことも眼中にない。アイスクャンデー売りのアルバイトなどをして自分で買った。

格好は整えたけれども、残念ながら目覚ましい活躍はできなかった。広瀬川の河川敷に

ある大学のグラウンドでの練習では鋭い打球を飛ばすものの、試合ではさっぱり打てない。野球部も弱かった。年に1回、東京帝国大学、京都帝国大学、東北帝国大学の三帝大対抗野球があり、東京に遠征して私も出場したことがある。東京帝大戦だった。健闘むなしく0対17で負けた。「東京まで遠征して何をしてきたんだよ」と揶揄やぶされて「ラグビーの試合をしてきたのさ」と負け惜しみを言った。

よく学び、よく遊べ

誰の入れ知恵だったかは忘れてしまったが、東北帝大2年生のときに仙台市の向山というところに一軒家を建てた。平屋建てで6畳間が3部屋。下宿人を募って私は大家になった。資金は住宅金融公庫から借りた。戦災復興のために住宅の建設が盛んに奨励されていたから、学生でも何とか融資が受けられた。3部屋はすべて2人の相部屋で、私も住むから下宿人は5人。賄いの女性を雇い、部屋代の収入で借入金返済する計画が何とかうま

くいった。

入学してから下宿をいくつかわ変わったが、どこも住み心地がひどく悪かった。安下宿だから仕方がないとはいえ、日当たりが悪くて冬になると寒さが身に染みた。生活物資の配給制が続いていて、いつも腹が減って仕方がない。口うるさい大家さんもいて、何かと不便で窮屈だった。

今度はおんぼろ下宿と違って新築だ。部屋は狭くて、生活は相も変わらずつましい。でも、自分たちの「城」があるのはうれしい。下宿人は関東や関西の出身者がほとんど。大家が友達の私だから遠慮はいらない。

大学の友人や下宿人たちとよく遊んだ。何といても冬はスキー。仙台から仙山線で山形に向かい、金井という駅（1951年3月蔵王駅に改称）から15キロメートル歩いて蔵王連山へ。苅田岳（かっただけ）の頂上付近から熊野岳の麓を巻いて高湯温泉（いまの蔵王温泉）まで標高差約880メートルを一気に滑走する。実に爽快だ。もちろんリフトはないから1日1本しか滑れない。土曜日に行って日曜日の夜行で帰るのだが、もう一泊して、もっと滑りたい。一計を案じて月曜日に講義を持っている教官を誘うと「おう、行くぞ」との返事。

まったくもって、のんきな時代だった。先生と一緒に山登りや海水浴にもよく出かけた。愉快に遊興三昧と思われると困るので、勉強と研究のことも書かなければいけない。いろいろな研究上の課題の解決に精を出した。

最大のテーマは、半導体を使うケイ素の性能アップだった。産業振興に欠かせない電力用整流器の能力を上げるには、半導体の品質向上が緊急の課題だった。ケイ素に限らず半導体を使う金属材料の純度を上げる地道な実験と研究を延々とひたすら繰り返した。

坩堝くわつぼに入れた素材を高温で溶かす際、超微細な不純物をいかに減らすのか。いろいろなことを試みた。「高周波発振回路のコイルのなかに金属材料を置いて、振動で素材を浮き上がらせることで不純物を除去する」。そういう効果的な手法にたどり着いた。これだ、と喜んでいたら、このやり方はすでに米国で導入されているのがわかって、研究スタッフ一同が落胆した。トライアル・アンド・エラーの日々は苦労の連続だったが、やりがいがあった。

就職難の時代だったが、31人の同期生のほとんどが鉄鋼、軽合金、銅合金などの希望の企業に就職した。産業復興が次第に軌道に乗り、産業素材メーカーも人材を求めはじめて

いた。公務員試験を受けて東北大学に就職した同期は私を入れて3人。工学部の助手として金属材料研究所で研究を続ける毎日だった。そして2年目に入って間もなく、大きな転機が訪れた。

行動する科学者として



電気通信研究所

「電気通信省（1949年、通信省から分離して郵政省とともに設置。1952年、日本電信電話公社の設立によって廃止）電気通信研究所に研究員の口があるんだよ」。1950年（昭和25年）、東北大学工学部を卒業して工学部の助手として金属材料研究所での研究に没頭して1年が過ぎたある日、増本量ますもと はらる所長にそう言われた。

電気通信研究所は、通信省から名前が変わった電気通信省が私の実家の近くの東京・武蔵野市に新設したばかりで、電話事業をはじめ通信分野のさまざまな研究にあたっていう。その後、1952年（昭和27年）に日本電信電話公社の電気通信研究所になり、現在はNTTグループが所管している。いまでは、分野ごとに分かれた研究所が各地にあるが、当時は武蔵野市の研究所のみだった。

大学での金属材料学の研究の面白さに大きな魅力を感じていたが、「これからの通信技術の急速な進歩と、それに伴う産業の発展を考えると、金属工学の知見は社会で大いに活用できるはずだ」と確信していたので電気通信研究所に強く惹きつけられた。

もうひとつ、大きな動機があった。以前から私は米国のベル研究所に多大な関心を抱いていた。憧憬に近い思いだった。ベル研究所は、電話機を発明したアレクサンダー・グラハム・ベルが1880年に設立した（ベルがボルタ賞の賞金で設立したボルタ研究所が起源）。1960年代初めには半導体の研究に精力的に取り組み、電話事業や通信機器製造などで巨大企業に発展しつつあった。

電気通信研究所に入って、私も半導体の研究に携わり、ベル研究所に追いつき追い越す。そんな夢があった。電通研でその夢を叶えたいとの思いもあった。まだ性能が低い日本の半導体のレベルの向上には、ケイ素、セレン、テルルなどの金属材料の精度アップが欠かせない。研究所の仕事は大学での研究の延長線上にあるが、「新しい発想で思い切り研究するぞ」と意気込んでいた。ところが――。

配属先は希望どおり基礎研究部だったが、実際に回ってくる仕事は、成長著しい電話通

信事業の現実的な問題を解決するための調査研究ばかり。平たくいえば、日常業務の「困りごと」の解決である。問題はどんどんわいてきた。

まず取り組んだのが、電話局にある電話交換局の操作盤の摩耗の問題改善だった。そのころ全国即時ダイヤル通話が急ピッチで普及していた。電話交換手につないでもらうのではなく、ダイヤルを回せば市外や県外に電話できるシステムである。「ステップ・バイ・ステップ交換方式（自動式電話交換機の一方式）」と呼んでいた。自動とはいえ、電話局の交換局でオペレーターが、ワイパーという上下にステップする操作盤で瞬時にダイヤルの数字を押して相手につなげるのだ。

操作盤は銅の合金製。市外、県外通話のダイヤルは「0」から始まるので操作の頻度が高くなる0の文字盤がどうしても摩耗してしまう。銅合金に代わる素材を見つけ出すことが課題となった。研究室長の中山正和さんなかやまさかずと懸命に知恵を絞り、いろいろな素材で実験した。頻繁に摩擦しても摩耗しない素材が必要だった。

長い試行錯誤の末、たどり着いたのは、銀と白金の合金だった。実は意外なものがヒントになった。中国の端溪たんげいの硯すずりである。微細に分析すると表面に摩耗を防ぐ目に見えない金

電通研の仕事

日常業務で生じる、さまざまな「困りごと」の解決に奔走する毎日が続いた。まだ30代で元氣満々、非常に楽しかった。研究室長の中山さんは14歳年長で専門は物理学、私の専門は金属材料学だ。異分野の2人が知恵を出し合って考え、実験と議論を重ねて次々に



電気通信研究所時代、妻の節子と

属粉があつて、それが銀と白金の成分に似ていたのだ。研究室のなかに閉じこもっているだけでは決して浮かんでこないアイデアだ。思いもつかない発想の飛躍が求められるのである。それがとても面白くて、やりがいがあつた。



ステップ・バイ・ステップ自動交換機の
200万回動作試験でワイパー交換を行っ
ているところ

降ってくる難題を悪戦苦闘しながら解決していった。
研究所の人たちがわれわれにつけたニックネームは「ディレクタント（好事家）2人組」。
正統なやり方だけにこだわらず、奇想天外な手を使うこともよくあった。「芸術的な手法
だよね」と2人で自画自賛していた。まさに物好きな、好事家のような2人である。課題
が現実的だからこそ、発想を大胆に飛躍させないと解決策が見つからない。

「電話交換局の交換機がさびるの
を何とかしてくれ」「廃棄した通信
ケーブルからの銅の回収率を上げ
る手立てはないか」など、日々の業
務から生じる、解決策が見つけないく
い問題が回ってくる。そのたびに私
は金属材料学の、中山さんは物理学
の知見をベースにして地道な実験
を繰り返して、電機メーカーや素材

メーカーなどの技術陣の知恵も借りながらクリアしていった。

面白いミッションもあった。「大阪・枚方市の遊園地の池に長さ2メートルの小さな船を浮かべて（いまでいうラジコンで）自動操縦せよ」との依頼が舞い込んできた。いまなら子どもでも操縦できるが、1950年代の半ばのことだ。さまざまな技術やシステムを総合して運用しなければ実現できない。私はシステムの責任者を任された。電話交換機を積み込んで、内蔵する簡易な電算装置を基地にして、動力系、操縦系、無線系、自動支援系に分けて、それぞれに電気通信研究所や企業の研究所の人たちの協力も得た。

そして本番。「やった」「動いたぞ」。船が小さな波を立てて水面を滑りはじめると歓声があがった。規模こそ小さいが、多彩な分野の技術者が連携してシステムをつくり上げ、稼働させる。いまでいうシステムエンジニアリングのプロトタイプだったかもしれない。

私が研究所にいた1951年（昭和26年）から1961年（昭和36年）の10年間は科学技術が急激に進化した時代だった。日本でも1953年（昭和28年）にテレビ放送が始まり、1950年代後半から1960年代にかけてトランジスタラジオが普及した。

1956年（昭和31年）には南極観測がスタートし、1963年（昭和38年）には茨城県

東海村で原子炉が稼働している。

私が一番感銘を受けたのは、1957年（昭和32年）10月4日、ソ連（現ロシア）が世界初の人工衛星「スプートニク1号」の打ち上げに成功したことだ。地球衛星軌道に入ったスプートニク1号は、東京からでも確認できた。武蔵野市の研究所の屋上から、夕空に描かれた航跡を眺めていたのを、いまも鮮明に覚えている。

私たちが電話交換システムの改良に懸命に取り組んだステップ・バイ・ステップ交換方式は、電子交換方式に取って代わられ姿を消していった。最後まで動いていたのが神奈川県相模原電報電話局橋本分局だった。その機器の一部をもらい受けて、私はいまでも大事に保管している。

東海大学の教員に

「達郎、話があるんだ」。父の重義に呼び出されたのは1960年（昭和35年）の年末だっ

た。用件は予想どおりだった。「東海大学をそろそろ本格的に手伝ってくれ」。

東海大学は、1955年（昭和30年）に静岡県清水市（現静岡市清水区）から東京の渋谷区富ヶ谷に本部キャンパスを移して間もない。莫大な借金を抱えて新しい校舎をつくつたが、学生は思うように集まらない。まだ雌伏のときで、理事長の父は大学の再建に懸命だった。

その一方で、衆議院議員として日本を科学技術創造立国にする基盤づくりに躍起だった。そのころは科学技術庁を創設して研究機関の整備が大詰めで、日々、奔走しているさなかでもあった。

私は電気通信研究所勤務の傍ら、1957年（昭和32年）から非常勤の講師として東海大学工学部で授業を受け持っていたが、今度は専任教員になれ、というのである。

電気通信研究所で「困りごと」の解決に駆け回ったことばかり書いてきたけれど、金属研究室や磁性材料研究室で研究主任を務めた。在職中の10年間に学術論文を10本書いた。自慢話になるが、日本電信電話公社の総裁賞を2回もらっている。

「もう研究はいいだろう」。父はそう考えていたのだろう。口調は穏やかだが、これは命令

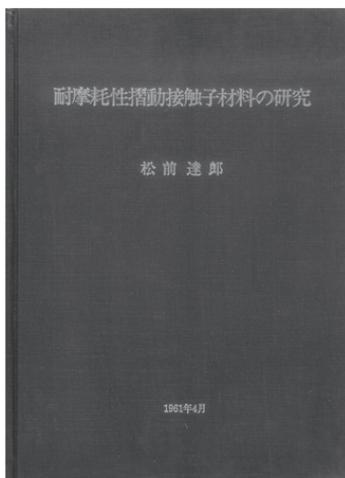
だ。断れっこないのである。

電通研の仕事に未練はあったが、若い大学生に教えることにも魅力を感じはじめていた。研究員として10年間いて、そろそろ新天地で好きな学問や研究をしたいという思いも強まっていた。「やります」と私は答えた。1961年（昭和36年）3月に電気通信研究所を退職して、同年4月に東海大学工学部応用理学科金属工学専攻の助教授に就いた。

「学生に教えるとはどういうことなのか」。私なりに自問してみた。「よい教員とはどんな教員か」。答えは簡単ではない。よい教員像はひとつではないだろうと思った。

教壇に立つ日々が始まった。理想とする教育者になるには経験が不可欠だ。焦らずに努力するしかない。まず、心がけたいと考えたのは、「知識の切り売りではなく、学問の価値や意義を伝えたい」ということだ。もちろん覚えるべき知識や技能はたくさんある。だが、それだけに収斂しゅうれんせずに、平和で活力ある日本、そして世界に貢献する人材を育てること。それは本学の建学の精神でもある。

学生への教育はもちろん大事だが、自分の研究も大事にしたい。1962年（昭和37年）には東北大学工学部から工学博士号をいただいた。博士論文は「対摩耗性摺動接触子材料



博士論文「対摩耗性摺動接触子材料の研究」

の研究」。電話交換機の摩耗防止に威力を発揮した合金の開発についてまとめたのだ。1963年（昭和38年）4月に工学部の教授になった。

教育と研究の両輪が動きはじめたが、学務がだんだん忙しくなってきた。東海大学



工学部応用理学科金属工学専攻研究室（代々木校舎）での著者（中央）

が次第に学園としての規模を拡大して、短期大学部、九州東海大学、北海道東海大学を創設した。系列の高校なども増えた。1963年（昭和38年）に大学教務部次長、1965年（昭和40年）に法人学務局次長兼務になり、法人の評議員にもなった。1967年（昭和42年）には大学学事部部长兼務を任された。

教壇に立つ時間は減り、研究に割く時間も削られる。こんなはずではなかったの思いもあったが、次第に心境が変わってきた。「学務に精励して東海大学をよい大学にする。それも教育なんだ」と腹をくくった。

望星学塾——東海大学の源流

東海大学の学務は次々に降ってきた。学部の新設をはじめとする学内の仕事のほか、国際交流を精力的に進める父をサポートするため、多種多様なミッションをこなした。講義や自分の研究どころか、次第に席の暖まる暇ひまもなくなってきた。

そんななかでも、父が理想に燃えて建学した学園の苦難の歴史にあらためて思いを致し、やる気を奮い立たせた。

東海大学の原点をひとつ挙げるなら、父が東京・武蔵野の自宅の敷地につくった「望星学塾」である。1930年代に父が仲間たちと開発に成功した「無装荷ケーブル長距離通信方式」が、望星学塾創設のきっかけになり、やがて東海大学の母胎となった。

従来の通信ケーブルは約2キロメートルごとに伝導性の高い銅製のコイルを巻いておく方式だったが、無装荷方式ではコイルの代わりに小型の増幅器を装着する。その結果、通話の際の雑音がほとんどなくなり、複数の回線を同時につなぐことができるから、性能と利便性、そして経済性がかなり向上する。

それまでの通信装置はほとんどが外国製だったが、父たちは「オール国産」で開発する目標を掲げた。メンバーは、父の通信省の後輩で、のちに科学技術庁の初代事務次官になり、東海大学の学長、科学技術庁顧問になられた篠原登^{しのはらのぼる}さんを筆頭に、若い官僚や研究者らが集った。私も子ども心にも熱気を感じた。

国産でつくるため、増幅器のなかの真空管や金属材料の改良に懸命に取り組んだ。数多

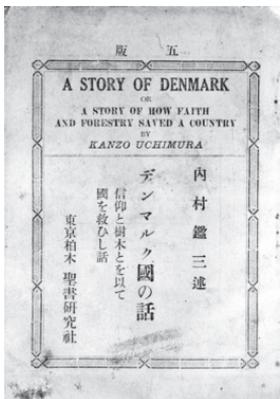


浅野博士奨学記念館（望星学塾）

くの国内メーカーの技術者の皆さんの協力を得ながらの作業だった。

山口県下関と韓国・釜山^{プサン}を結んだ通話実験が成功すると、それまで半信半疑だった電気学会や産業界も優れた性能を認めて称賛した。同学会は1935年（昭和10年）1月、画期的な発明に授与する「浅野博士奨学祝金」を父たちに贈呈した。金額は10000円。父はそれに母の実家からの借金を加えて塾をつくった。これが、東海大学の母胎「望星学塾」である。

望星学塾では、若い官吏や会社員、学生などを募って、聖書を講じ、人生観や歴史観を養う研究会を開いた。寮や図書室、体育館



内村鑑三の聖書研究会での講演録『デンマルク国の話』

も備え、講演会を開き、父は得意な柔道も教えた。幼い私も稽古に駆り出されたが、投げられてばかり。受け身が身に付いた。

塾の教育の手本になったのは、デンマークの国民高等学校（農村青年を対象とした全寮制の学校）である。内村鑑三先生の講演録のなかにある『デンマルク国の話』（のちに岩波文庫『後世への最大遺物・デンマルク国の話』として出版された）



1940年秋、望星学塾塾生らと家族でデンマーク体操

や研究会での講演に感銘を受けた父は、のちにデンマークに赴いて国民高等学校を視察している。戦争で疲弊し、豊かな領土を失った同国は、荒地の開墾と植林、そして教育の力で、豊かで平和な農業・酪農国によりみがえったのだ。

まず、土木技術者のエンリコ・ダルガスが、肥沃な土地を失い、やせた土地ばかりになった国土に植林を勧め、農業と酪農を推奨した。教育者のニコライ・グルントヴィは、若い農業者たちを集めて全寮制の国民高等学校の創設を提唱した。正しい愛国心や歴史、哲学、芸術など質の高い教育をした。教師と生徒がともに暮らす学び舎だ。やがて国民高等学校は全国に広がり、卒業生たちは国中で農業を実践していった。戦争で失った国土を教育の力でよみがえらせたのである。

父は、デンマークの国民高等学校を範とした青



右：土木技術者エンリコ・ダルガス
上：教育者ニコライ・グルントヴィ
(出典：デンマーク王立図書館)



年道場、望星学塾を創設し、そこに次のようなメッセージを掲げた。

「若き日に汝の思想を培え

若き日に汝の体軀を養え

若き日に汝の智能を磨け

若き日に汝の希望を星につなげ」

望星学塾は太平洋戦争によりいったん活動を停止したが、戦後、復活していまも健在だ。並行して父は戦前から、いまの静岡県静岡市清水区に航空科学専門学校を、東京都中野区に電波科学専門学校を創設。この2校が合併して東海専門学校（のちに東海科学専門学校に改称）になり、戦後間もなく旧制の4年制大学の認可を得て、そして新制の東海大学が誕生した。望星学塾の精神はいまも連綿と受け継がれている。

海洋学部

東海大学の充実の象徴のひとつが、学部・学科の新設である。なかでも、私が大学の一員になった翌年の1962年（昭和37年）4月に新設した海洋学部が思い出深い。

新設までには困難の連続だった。日本には水産学部はあるが、海洋学部はない。当時の文部省は「海洋学という学問は存在しない」という理由で、学部創設に難色を示していた。役所というものは、どうも新しい挑戦に消極的なのだ。それでも何とか文部省の許諾にこぎ着けた。

海洋学部を英語に訳すと「School of Marine Science and Technology」である。われわれの狙いは、自然科学と人文・社会科学を融合した新たな学問分野の開拓だ。

「海洋は詩情をそよる

しかしその中には無限の資源がある

若人よ 外に領土を求めず

海洋に資源を開発しよう」

学部創設の際、父の松前重義がつくった詩の冒頭である。この若者へのメッセージには平和への強い願いも込められている。

父は海を愛していたが、船はあまり好きではなかった。船酔いがひどいのだ。私も酔いはするが海が大好きだ。海は世界につながっている。海に出ると心が躍る。だから海洋学部の新設に意欲満々でかかわってきた。

大学にゆかりの清水市（当時）の駿河湾沿いにキャンパスを置いて、航海士の育成や水産学、海洋考古学をはじめとする多彩な教育メニューを用意したほか、海洋資源調査や汚染調査、気象・地震調査をメインにして、座学と実習の両輪で授業を進めた。海や魚が好きな若者が集まり、海洋の専門家の皆さんを教員に招いてユニークな授業がだんだん軌道に乗ってきた。

実習に使う船は、当初は中古の小型船だった。総トン数191トンの「東海大学丸」で



1968年1月、東海大学丸二世就航

ある。大きさも性能も近海の航行がやつとだったため、「海外渡航もできる自前の船をつくりたい」と考えて準備作業を始め、私は新造船建造委員を買って出た。石川島播磨重工業（現IHI）に依頼して、同社の東京・豊洲にある工場の会議室で具体的な検討を始めた。

構造や設備・装備などをめぐって議論が百出した。性能も重要だが、乗り組む教員や学生たちの安全が何よりも大事である。長い航海もするので、揺れを極力少なくして、できる限り安全で快適な航海を実現したい。

新しい船は、総トン数702トン（就航

時)の中型船である。私は「東海大学丸二世」と命名した。待望の大学自前の船である。就航したおかげで海洋調査の幅がぐんと広がり、学生を乗せる実習船としても大いに活躍した。省庁、研究機関、自治体などからの委託調査も増えてきた。

この船は長年の私の夢も叶えてくれた。学生たちと一緒に海外を航海する。これが教育者としての最大の夢だ。大学の自前の船で学び、語り合い、海や星を見て外国の若者たちとも交流した。

海外研修航海

東海大学の春の恒例行事に海外研修航海がある。半世紀以上続く伝統行事だが、2019年度(令和元年度)から新型コロナウイルス感染拡大の影響で中断した。残念なことだが、参加する学生や教員たちの安全が何より優先なので、やむを得ない判断だった。2022年度(令和4年度)には、国内航路によって再開を果たした。



2000年2月、第31回海外研修航海出航式で乗船する学生を激励

これも本学のユニークな教育プログラムである。初めのころは学生が70数人、教員は数人の小さな航海だったが、近年は約1カ月かけて南太平洋や東南アジアを歴訪してきた。参加者も学生が100人、教員15人ほどの大がかりな船の旅になっている。東海大学の海洋調査研修船「望星丸」（国際総トン数2174トン）を使っている。

私はさすがに全航程に乗り込むことはできないけれど、時間が許す限り参加してきた海が好きだから船に乗り込むとやっぱりうれしい。学生や教員たちに「総長、子どもみたいな笑顔ですね」と冷やかされる。

卒業を控えた学生たちには洋上で卒業式も

する。男女はおよそ半々。長い航海のあいだに仲良くなつて、その後、結婚に結びついたカップルもいる。その子どもが本学に入学して参加している。最近では孫も来ている。実をいうと、私の次女・めぐみも、この研修で知り合った男子学生と結婚した。

望星丸は海洋学部の実習船兼海洋調査船で、客船のステータスも持っている。船上では勉強も大事なミッションだ。海や星座に関する講義もする。レクリエーションや交流会、甲板でのフットサルもある。掃除も必須科目で、甲板磨きに精を出す。

寄港地では現地の大学生たちと交流して、彼らの案内で各国の名所旧跡などを訪ねて回る。外国の同世代の若者たちと自然なかたちで交流するのも研修の大きな目的である。

船上では共同生活だから、規律が何より不可欠となる。自主性と協調性が大切だ。みんなきびきびと役割を果たす。研修を終えて帰国すると、学生たちは見違えるほど大人になつていて保護者がびつくりすることもしばしばだ。

この研修は東海大学が誇る個人的な教育といつていい。勉学もスポーツもとても大事なのは言うまでもないが、青春の真つただなかに世界につながる海の上で仲間たちとともに過ごす経験は何物にも代えがたいだろう。

海と船で思い出すのが、東北帝大生だったころの強烈な体験だ。初秋のある日、休日に友人と2人で宮城県塩釜港から大学のヨットで、名勝・松島の遊覧を計画した。小さな帆船である。晴天、微風の素晴らしい日和だった。2時間ほどで松島湾に着いて湾内の島々をのんびりと周遊した。本当に爽快だった。

午後になると曇ってきた。風も強まった。「早めに戻ろうか」と相談して、港に戻ろうとした途端、急に風が強まり、雨が激しくなった。帆を懸命に操作したが、ヨットはどんどん沖に流される。波をかぶって船底に海水がたまりはじめた。転覆の危険信号だ。

「だめかもしれない」と覚悟したときだった。中型の船がエンジン音を響かせ、波を縫ってやってきた。海上保安庁の巡視艇だった。私たちを船に引き上げると中年の船長さんが「危ないなと思って見守っていたんだよ。海は怖いぞ」と言った。冷静で柔らかい口調だった。「海の男だ、格好いいな」と思った。

海へのあこがれと恐ろしさを実感した体験だった。それが、海への強い思いの原点である。

第4章

政界の24年



政界へ

政界に進出したのは、半ば父の命令だった。「教育と政治は両輪」。それが父の持論だった。大学教育は政治と無縁ではいけないというのは、東海大学を建学して苦勞しながら学園の拡充に心血を注いできた父の強い信念なのだ。

政治の力で自分の大学運営を有利に導こうというのではない。教育行政は、教育の振興というよりはむしろ、規制や管理に重きを置く傾向があるのではないか。政治の力で教育行政をコントロールして、より自由で闊達な教育振興を実現したい。その思いは私も同じだった。

国際社会に通用し、国際平和に貢献する若者を育てるために教育をレベルアップしたい。そして、科学技術創造立国の実現に貢献したい。この2点が、政界進出の原動力になった。

父は1952年（昭和27年）、第25回衆議院議員総選挙で旧熊本1区から立候補して初当選を果たした。次点で一度落ちたが、衆議院議員を連任6期務めて1969年（昭和44年）に引退した。私は、その地盤を引き継ぐかたちで1974年（昭和49年）に、第10回参議院議員通常選挙に熊本選挙区から日本社会党公認で出馬した。

選挙戦では戸惑うことばかりだった。大学の学務に忙殺されて、父の選挙をほとんど手伝わなかったのも、右も左もわからない。なにしろ半世紀近くも前のことだから、いまの選挙事情と大きく異なる。びっくりすることの連続だった。

保守地盤の強い地域では、竹槍を持った人たちの妨害で遊説に入れなかった。遊説でマイクを握ると声が出ない。いつの間にかマイクのコードが切断されていたのだ。選挙カーのガソリタンクに砂糖を入れられて、走れなくなったこともあった。とにかく激しい選挙戦だった。

当時の全日本電機機器労働組合連合会（電機労連）や全農林労働組合（全農林）などの組合の支援を受けた選挙だった。参謀の人たちの票読みの確かさに驚いた。ある郊外の農村で遊説を予定していたが、「あそこは行っても行かなくても、入る票は同じです」と言う。

ふたを開けてみると、そのとおりだった。

父の故郷とはいえ、私は熊本で暮らしたことがない、典型的な落下傘候補である。前年の1973年（昭和48年）に熊本に開校した九州東海大学の学長だったから、大学を通して熊本の活性化につなげると懸命に訴えた。大接戦だった。

そして開票日を迎えた。得票は28万1543。次点だった。1万票あまり届かなかった。後日聞いた話だが「松前重義」と父の名前を書いて無効になった票がかなりあったという。それでも負けは負けだ。私の力不足が敗因である。汗を流して頑張ってくれた秘書やスタッフ、組合員の皆さん、支援してくださった方々に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

1977年（昭和52年）7月、今度は第11回参議院議員通常選挙全国区から出馬した。そのころの投票は記名式だから、私の名前を売り込まなければならぬ。全国を東奔西走、体力勝負だった。支持を訴えて全国を遊説するほか、支援してくださる労働団体などの各地の支部を回る。宴会も多いが、私はあまり呑まない。支援に感謝しながらも、我慢して酒席をこなしていったが、各地の電機労連の支部で若い技術者の組合員たちと通信や科学技術の未来を語り合うのが楽しみだった。私は「行動する科学者」をキャッチフレーズに

していた。

面白い逸話もある。北海道の全農林の支部を訪ねたときだった。「松前はだめだな」「そうだね、だめだよ」。そんな会話が漏れ聞こえてきた。ドキッとした。また落選か……。だが、聞いてみると、北海道産の米「マツマエ」の作柄が天候不順で冴えないという話だった。

そうしたうちに投票日になった。結果は当選。肩の荷が下りた。得票は8万4969票。支援者の皆さんや私に投票してくださった方々に心から感謝した。妻の節子せつこもよく頑張ってくれた。

国民の負託に応えようと身が引き締まった。

政治信条

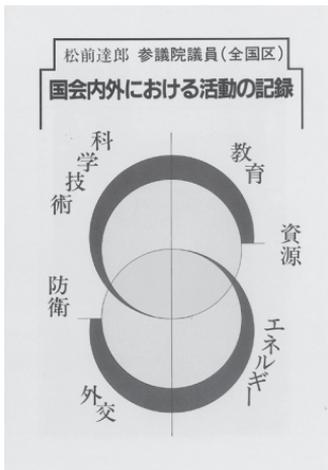
1955年（昭和30年）に成立した原子力基本法には、父、重義も深く関与している。

この法律には、父が所属する日本社会党は反対していた。被爆国として原子力そのものに対するアレルギーが強かった。国民の意識も反原発だったように思う。だが父は原子力の平和利用の重要性を考えて法案成立に前向きだった。

私がかかわった同法の改正の最大の眼目は、原子力委員会と原子力安全委員会（現原子力規制委員会）の分割だった。要するに「原子力開発」と「安全規制」を分離するのだ。その趣旨には賛同したものの、安全の最終責任が曖昧だったから、私は反対した。

与党自由民主党などの賛成多数で改正法案は成立した。しかし、安全確保の責任ははっきりしないまま。もつと詰めた議論をするべきだった。2011年（平成23年）3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴う津波により発生した東京電力福島第一原発事故の対応がもつと適切にできなかったのではないかと悔いが残る。

1期目の任期が終わった。反省もあったが、私なりに懸命にやってきた。ここで私の政治信条をあらためて書いておきたい。2期目の全国区への立候補の際につくった再選へ向けた冊子『松前達郎参議院議員（全国区）国会内外における活動の記録』のなかにある「松前達郎の政策」から引いてみる。4つの公約が掲げている。



『松前達郎参議院議員（全国区）
国会内外における活動の記録』

- 1 ゆとりある暮らしを、豊かな社会の実現を
- 2 科学技術教育を推進し、教育環境の整備と私学の振興
- 3 食料・資源・エネルギー政策を転換し、学術・文化の交流を通じて相互理解を
- 4 雇用不安の解消と、新しい産業構造の強化、創造を

1983年（昭和58年）のことだから時代環境も大きく違うが、今日なお課題として残っているものも少なくない。

参議院議員3期目の1993年（平成5年）11月に環境基本法ができた。私は参議院の環境特別委員会の委員長だったので感慨がある。複雑化して地球規模に広がっている環境問題を総合的かつ具体的に改善する指針を含む、未来を見据えた法律である。政府による基本計画や施策のプログラム

などを規定している。法律の意義は大きい。施行に伴って、公害対策基本法を廃案にした。新法は、この法を包含しているのだ。新たに、循環型社会形成推進基本法、生物多様性基本法ができた。こうした世の中の変化や進化にも、この法律が貢献している。

科学技術基本法

1995年（平成7年）に成立した科学技術基本法も思い出深い。

同法の制定に向けて、私と自由民主党の中山太郎さん、社会民主連合代表だった江田五月さんが代表発起人になって国会議員と有識者で「科学技術と政策の会」を立ち上げた。これに超党派の国会議員156人が参加し、難航を重ねていた科学技術基本法に成立のメドが立ったのである。

超党派で法案を提出して、ようやく全会一致で成立した。中山さん、江田さん、科学技術庁出身で自由民主党の尾身幸次さん、鳩山邦夫さんをはじめ、多くの方々の尽力の賜だ。

由だった。法案は長年、日の目を見なかったが、やっと、「科学技術創造立国を目指す」という国の方針の実現に大きく寄与する法律ができた。

日本電信電話株式会社法

長い調整と論議が続いた日本電信電話公社民営化の際、私は参議院通信委員会委員長だった時期もあった（1984年8月から85年7月まで）。これも親子2代の話になる。父もかつて通信委員長をしていて、それを覚えていた中曽根康弘^{なかそね やすひろ}首相が委員長に推してくれたと聞いている。

賛否両論が渦巻くなかで、私のもとにも要望や陳情



1984年11月、通信委員会委員長就任祝賀会で祝辞を述べる山下泰裕
東海大学講師

が数多く寄せられた。大きな焦点は、日本電信電話公社の分割民営化だった。電電公社の幹部にも知己がたくさんいた。

結局、日本電信電話株式会社は1984年（昭和59年）12月に成立した。民営化した意義はとても大きいと考えている。この法律にはいろいろと感慨深い思いがある。

話は前後するが、議員在職中に政界は大きく動いた。政党の合従連衡が続き、戦後の自社両党を中心にする55年体制が終わりを告げた。私は1945年（昭和20年）に結党した日本社会党の盛衰を間近で見つめていた。

日本社会党の盛衰

1989年（平成元年）の参議院選挙は、土井たか子どい たかこ委員長の下、女性候補を数多く擁立して次々と当選、「マドンナ旋風」が吹いて日本社会党が躍進した。3回目の選挙になった私は比例区の名簿1位にしていただけ、開票率わずか2%で当選確実が出て、びっくり



1988年4月、参議院本会議で日本社会党議員として代表質問に立つ

した。

当時は、政界が激しく揺れ動いた時期だった。日本社会党が躍進する一方、自由民主党は惨敗した。「消費税導入」「宇野宗佑首相の女性スキャンダル」「リクルート事件」のトリプルパンチが響いた。

自由民主党の低迷はその後も続き、政界は流動化する。1993年（平成5年）8月の衆議院選挙では自民党が過半数を割り込み、非自民・非共産の8党派連立による細川護

熙内閣が誕生。自由民主党は

1955年（昭和30年）の結党以来、初めて下野した。

その後の政権交代も目まぐるしかった。細川退陣を受けて新生党の羽田孜さんが首相に就いた。非自民、非共産の連立政権だったものの、日本社会党

が政権から離脱して少数与党になり、短命に終わる。

そして、1994年（平成6年）6月、自民、社会、新党さきがけの連立によって村山富内閣が発足する。村山内閣は自衛隊合憲を掲げ、湾岸戦争を契機に米国の要請でPKO（国連平和維持活動）に参加し、海外派兵を容認した。それによって日本社会党内は大揺れ。参議院本会議でのPKOの審議では、私も強行採決に反対する牛歩戦術に加わった。審議は難航に次ぐ難航。国会に6日間泊まり込んだ。大変だったが、得がたい経験だった。

1994年（平成6年）の羽田孜内閣発足直後の組閣の際、科学技術庁長官として入閣の打診があったが、断った。羽田首相が科学技術庁長官を兼務した。

その後、村山内閣のときには郵政大臣就任を求められたが、やはり断った。郵政大臣には日本社会党の大出俊さんが就任した。

入閣を2度辞退する人は珍しいと言われたが、「大臣になるより、大学の最高責任者としての職務をまっとうしたい」との思いが強かった。政界に進出して以降、私は学校法人東海大学の中枢ポストに上り詰めた。初当選した1977年（昭和52年）に法人の副理事長、1980年（昭和55年）に副総長、1987年（昭和62年）に大学の学長に就いた。そ

して1991年（平成3年）1月には法人の理事長に、10月に総長に就任した。

1995年（平成7年）、学務の責任が重くなったのを受けて、「3期目を終えたら、次の選挙には出ない」と決めて支援団体などに意向を伝えていた。科学技術基本法成立など、自分なりにやるべきことはやったと思った。

だが、最大の支持母体、電機連合の幹部から「ぜひ、もう1期」と求められた。「政界の激変期にあつて、科学者であり教育者である国際感覚豊かな良識派の松前先生が欠かせない」と過分な推薦の辞をいただき、熟慮の末に出馬を決めた。

村山内閣で政権の一翼を担った日本社会党だが、政界再編の大波のなかで次第に退潮が鮮明になる。その後、あらためて自衛隊を違憲としたが、党内の議論に一本筋が通っておらず、政策が曖昧模糊としているように感じた。「党の根幹がはっきりしない。ついていけない」と感じた。

1996年（平成8年）1月、社会民主党ができると日本社会党の黨員の多くが同党に移り、私は院内会派「新緑風会」に加わった。その後、社民黨員の多くが民主党に合流したが、2022年（令和4年）の参議院選挙では、土俵で踏みとどまっている。

国会議員は原則として合議の世界で党議拘束もある。国会という狭い世界の意見調整がきわめて大事で、どうしても視野が狭くなりがちだ。党利党略が優先され、国民のニーズや世界の動向から目を背けてしまうことさえある。もっと広い視野で柔軟に考えて論議し、政策を立案しなければいけない。私の反省を踏まえて、そう考えている。2001年（平成13年）7月の選挙には出馬せず、政界から身を引いた。

議員を退く

政界を引退して、すがすがしい気分だった。国民の負託に応えて政務にあたってきた自負はあるが、政界への未練はまったくなかった。

24年間、参議院議員を務めた。選挙期間中を含めると25年間、政治の世界にいたことになる。感謝とお礼をしなければいけない方々は大勢いる。特に最大の感謝をするべきなのは、秘書の皆さんだ。彼ら彼女らがいなければ、国会議員の重責をまっとうすることがで



参議院議員室にてアマチュア無線通信で交信

きなかつただろう。心から「ありがとう」と言いたい。

そんな議員時代に楽しい趣味ができた。当選して間もなく、アマチュア無線の免許を取ったのがきっかけだ。もともと機械いじりや通信機器が大好きだったが、やりはじめると本当に面白い。世界中の人たちとつながるからだ。

凝り出すとますます楽しくてたまらない。自宅にもクルマにも無線装置を積み込んだ。無線に使うアンテナを付けようとして自宅の屋根に上ったのはいいが、作業に熱中するう

ちに屋根から庭に転落してしまった。窓から私の作業を見上げていた長女・のぞみがちよつと目を離したときの出来事だった。「あつ、パパがいない」と気づいた娘が、庭で倒れたまま、うんうんうなっている私を見つけて大騒ぎになった。

庭には岩が置いてあり、そこに激突したからたまらない。両方の足首を骨折して頭

を10針、頬を7針も縫った。死ななかつたのは、小学校のころに自宅に父がつくった望星学塾で柔道の受け身をたたき込まれたおかげだった。それで命拾いしたわけだ。

国会議員でつくるアマチュア無線倶楽部の会長は、首相にもなられた小淵恵三おぶちけいぞうさん。党派を超えた同好の士の語らいは楽しかった。アマチュア無線の普及のための活動にも取り組んでいる。いまやスマートフォン全盛の時代だが、無線の効用も見直すべきだと思っている。大災害のとき、スマートフォンが通じなくなる事態が起きても、無線は大丈夫だ。私の勧めで無線を使う東海大学の教職員も少なくない。

議員を退くにあたり、「24年間の政治生活を顧みて」という文書を書いた。関係者や支援者の方々にお礼を申し上げたうえで、多くの分野にかかわってきた政治家生活を振り返った。印象に残ったこととしては、これまでも書いてきたが、父と私の親子2代で成立に尽力した日本電信電話株式会社と環境基本法のことを書いた。

そして締めくくりとして、東海大学を中心としたさまざまな活動、国際交流事業などを通して若い人たちを育てると同時に世界平和に貢献したいとしている。その思いを、国会議員を辞してから実践してきたと思っているし、これからも持ち続けたい。

國際交流、
半世紀



交流から多くを学ぶ

半生を振り返ると、実に数多くの国際交流にかかわってきた。さまざまな国の本当に多くの人々と交流して多くを学んできた。学生たちと一緒に教育を受ける、得がたい機会も与えてもらったと感謝している。

初めての本格的な海外出張は、東海大学の教授になった1963年（昭和38年）のことだ。米国と欧州諸国を2カ月にわたって歴訪した。大学や教育機関の視察団に参加して、ブルガリア、ハンガリーとの文化交流協定に調印したほか、ソ連や東欧諸国と文化交流の交渉を進めた。この出張でも各国の要人の皆さんと交流して、実り多い旅になった。

国際援助のことも書きたい。タイの首都バンコクにあるモンクット王工科大学ラカバン校（KMILT）は1964年（昭和39年）に創設された国立大学である。タイの工業化

を支える技術者を育成するため、工業全般、特に電気通信分野に力を入れて、幾多の人材を輩出し続けている。その創設には、東海大学が大きく寄与しており、日本政府も創設当初から無償の資金援助や技術協力を続けてきた。

1960年（昭和35年）にできたノンタブリ電気通信訓練センターが同大学の前身だ。1964年（昭和39年）に3年制の大学になり、1971年（昭和46年）に5年制の国立大学に改変された。タイ国王ラーマ4世の名前をいただいてモンクット王工科大学と改称し、1982年（昭和57年）にはタイの大学で初めて電気通信分野の博士課程を設置するなど、タイきつての工科大学として成長を続けてきた。

東海大学はさまざまな大学と連携して学術交流や友好事業を進めているが、同大学がその先駆けである。留学生や研究者の相互交流、共同研究など多角的な交流を進めてきた。何年前かに訪ねると、研究設備や機器の充実ぶりに驚いて、「頑張らないと追い抜かれるぞ」と同行の本学スタッフに発破をかけた。

ソ連や東欧諸国と交流を深めるのに重要な役割を果たしたのが、日本対外文化協会である。その歴史は1964年（昭和39年）の日本社会党によるソ連訪問団に遡る。成田知巳

書記長を団長とする訪問団は、モスクワでニキータ・フルシチョフ共産党第一書記・首相やアナスタス・ミコヤン副首相らと会談した。その際、ソ連側から「日ソ間の幅広い學術・文化交流を進めるために組織をつくったらどうか」との提案があった。帰国後、当時の日本社会党委員長の河上丈太郎（かわかみじょうたろう）さんに報告して中央執行委員会に諮り、1966年（昭和41年）に協会をつくった。初代会長は父の松前重義だった。

協会の活動については書き切れないが、日ソの友好親善を學術・文化面から大いに促進してきた。現在の会長は私である。日本社会党はなくなったが、民間の立場から交流を活発に進めている。ちなみに本学の同窓会の海外支部は、ブルガリア、デンマーク、タイ、台湾、ハワイ、ロシア、韓国などにある。

ブルガリア共和国との交流も長い。ブルガリアに限らず各国から東海大学に留学したり、本学の学生が留学したりといった交換を通して草の根の交流が途絶えることなく続いている。

ブルガリアとの結びつきを象徴しているのが、同国立ラジオ放送局ソフィア少年少女合唱団だ。本学園の招きで行った同合唱団の公演は、1967年（昭和42年）の初来日

続く民間交流を象徴している。

ブルガリア共和国からは1997年（平成9年）11月に「勲一等マダルスキー・コニク最高勲章」を、2012年（平成24年）3月には「聖キリルと聖メトディ勲章」をいただいた。恐縮したが、長年にわたる文化、学術交流のご褒美と考えることができ取った。

世界一周研修航海

再び、海のことを書こう。大学の船の変遷はすでに書いたが、第1号の「東海大学丸」を皮切りに、自前でつくった「東海大学丸二世」、大型



松前達郎作詞
「かもめの季節」

かもめの季節

作詞 松前達郎
作曲 渡部 洋一
歌 飛ぶ鳥の季節
詞 松前達郎
曲 渡部洋一
レコード 東海大学株式会社
CD STEREO 東海大学株式会社

海よりもなお深い
友の情に返して、
今日よりはなお明日
語り合うのは君と僕

朝日を浴びて
飛ぶ翼 かもめ
わがしるし

山よりもなお高い
はるか空を胸に抱き
熱い道をなお熱く
たぎらせるのは君と僕

自由の風に
飛ぶ翼 かもめ
わがしるし

世界の空に
飛ぶ翼 かもめ
わがしるし

紅色そめて
飛ぶ翼 かもめ
わがしるし

道はひとすじ羽ばたいて
白い翼と飛んで行け
仰げば光る雲の降
東の海に陽が昇る

船「望星丸」、そして「望星丸二世」——。これらの船舶で水産資源の調査や海洋研究の幅がぐんと広がって、外部からの委託調査も引き受けた。そのミッションは年々拡充している。父と私には大きな夢があった。学生や若者たちを乗せて、本学の船で世界一周航海を実現するのだ。世界一周には、設備や装備、船長や機関長の資格はもちろん、国際航行資格や客船資格の取得が必要だ。1993年（平成5年）に竣工した3代目となる「望星丸」は国際総トン数2174トンで、乗組員を含めた乗船定員190人。航行速度はこれまでの本学所有の船の2倍近い15ノット。さまざまな準備を経て、ついに実現の日が来た。

航海日数127日間に及ぶ世界一周研修航海である。1996年（平成8年）6月27日、乗組員39人、研究者13人、海洋学部の実習生35人が乗船し、東京・晴海埠頭を出港して、まず、カナダのバンクーバーに向かった。ただ漫然と太平洋を横断したわけではない。海水調査や海上気象調査のほか、観測用のブイを流して、ごみの漂流調査もした。

当地のブリティッシュ・コロンビア大学は、本学が主導して1987年（昭和62年）に始めたアジア・環太平洋学長研究所長会議のホスト役をしていたなど長年、交流を続けている。今回の旅でも、学生たちと交流して数日間滞在した。

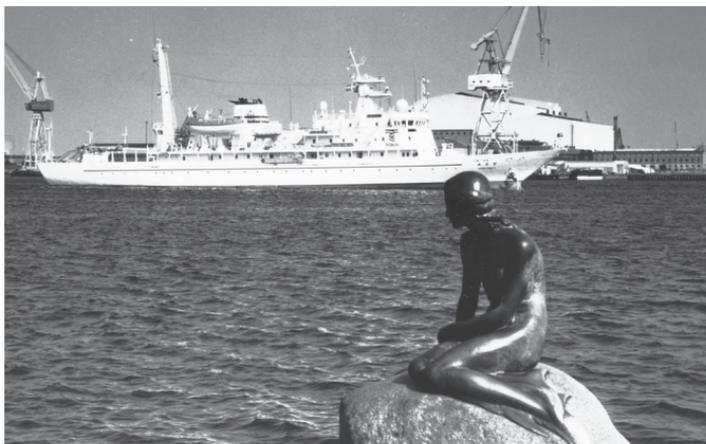
次は米国のサンディエゴ。私は先乗りしていたバンクーバーから乗船した。

サンフランシスコ沖で霧のなか、いきなり軍艦が現れて、びっくりした。日本の海上自衛隊の船だった。ちょうど米軍とリムパックの訓練中だったことがわかった。

サンディエゴでは、米大リーグのロサンゼルス・ドジャースの当時のオーナー、ピーター・オマリーさんが望星丸を表敬訪問してくださった。大の日本びいきである。野球好きの父と長年の友情で結ばれていて、私も懇意にしていただいている。

船は太平洋から大西洋に入った。パナマ運河を通り、世界一周のハイライト、デンマークのコペンハーゲンに入った。有名なリトル・マーメイド像（人魚姫の像）を眺めながら入港した。東海大学の建学の精神の源流の地である。感慨が胸に迫った。

本学がコペンハーゲンの北につくったヨーロッパ学術センターの開設25周年の記念行事を入港に合わせて開くことになっていた。同センターの2階のテラスからバルト海が望める。「ここから見える沖合に大学の船を浮かべたい」というのが父の長年の夢だった。この船旅でその念願を果たした。8月25日、父の命日だった。私にとっても人生のハイライトのひとつになった。



1996年8月、世界一周研修航海でデンマークに寄港。東海大学望星丸と人魚姫像

コペンハーゲンでは、学園傘下の大学、短大の研修生、コペンハーゲン商科大学の学生も乗り組んで交流した。船は地中海に入った。リスボン（ポルトガル）、マリョルカ島（スペイン）、シチリア島（イタリア）を経由して、シンガポール、バンコク（タイ）、基隆（^{キールン}台湾）を経て静岡県清水港に帰港した。

127日間の長い航海を振り返ってみると、「本当によくやったなあ」と思う。寄港地ごとに、研究者、校友会会員、付属校の生徒、大学や短大の学生がリレー形式で乗船した。参加した皆さんにとっても生涯の思い出になったに違いない。



1989年10月、ウラジオストク入港で盛大な出迎えを受ける

ウラジオストク入港

東海大学の船で世界一周することと並んで、私の夢だったことがあった。ソ連極東の軍港、ウラジオストクに入港することである。非常に意義のある国際交流であるとかねてから考えていた。

その夢が叶ったのが1989年（平成元年）10月3日のことだった。東海大学の海洋調査実習船「望星丸二世」で訪れたのだが、第二次世界大戦後、西側の国の船舶がこの港に入るのは初めてだった。

「学生たちを乗せてウラジオストクに船で行き

たい」。それはかなりハードルが高い願望だったが、意義は大きいはずだ。日ソの友好親善はもちろん、閉ざされた軍港を開放して日本海の安全と平和に貢献したいとの狙いもあった。

実現までの長い道のりを思うと、感慨がある。1986年（昭和61年）7月、当時のミハイル・ゴルバチョフ書記長のレーニン勳章授与記念式典演説（通称ウラジオストク演説）を聞いて、チャンスだと直感した。経済の立て直しを図るペレストロイカの一環で、この港を貿易基地にしたいという内容だった。

東海大学は長年、モスクワ大学（M・V・ロモノソフ・モスクワ国立総合大学）などと地道な交流を進めてきた。その縁で1987年（昭和62年）のモスクワ訪問の際、ソ連科学アカデミー（現ロシア科学アカデミー）のマルチューク総裁に「入港したい」との意向を伝えた。「考えておこう」という返事だった。翌年の訪ソのときにはアンドレイ・グルムイコ元外相にも同じ趣旨を伝えた。やはり「考えておこう」とのことだった。

その後、ソ連の関係者に会うたびにウラジオストク訪問の希望を伝えたものの、話は進展せず、「やはり実現は難しいな」と半ばあきらめていた。

ところが1989年（平成元年）7月、大学にソ連外務省から電報が届いた。入港の可否には触れずに「入港日を知らせよ」という。「10月には行くことができる」と返信すると、今度は「船の性能と機能を教えよ」とのこと。

望星丸二世は海外への研修渡航や海洋資源調査を重ねてきているから、水深や地形を自動計測する装置など十分な機能を備えている。船の性能をくわしく知らせると、間もなく「入港を歓迎する」というメッセージが届いた。待ちに待ったゴーサインだ。

うれしかった。歴史的な出来事である。遡れば1860年に開港したウラジオストクは、ロシアの極東の玄関口となる貿易、軍事の要衝だった。隣国の日本との関係も深く、明治の初めから豊富な漁業資源を目当てに日本人が住みはじめ、長崎との定期航路もできて貿易の実務をつかさどる日本の代表部が置かれた。日ロの交流はそのころから活発だったのである。

だが、1918年（大正7年）、ロシア革命に干渉して日本軍は大軍を上陸させる。いわゆるシベリア出兵だ。1922年（大正11年）に撤兵するのだが、日本の船舶がウラジオストク港を使うのはそれ以来で、実に67年ぶりのことなのである。私が陣頭指揮を執って

準備は着々と進んだ。学生代表や大学関係者、研究者、報道陣など113人が乗船して小樽から10月1日、出航した。

ウラジオストクの港がだんだん近づいてくる。わくわく、どきどきした。停泊中の船の姿がはつきりと見えてくると「あつ」と驚いた。意外な風景が目の前に広がっていた。湾内に停泊している軍艦の多くは破損していて、実働できそうなのは10数隻しかないようだ。まだ米ソ冷戦のさなかだったが、「まるで造船所だな」と感じた。

望星丸二世はウラジオストク駅の近くの岸壁に接岸した。ソ連の太平洋艦隊司令部の建物の目の前で共産党本部のすぐ横だった。

ロシアとの交流

ウラジオストクに到着すると盛大に出迎えられた。東海大学が長年にわたって交流してきた極東国立大学（現極東連邦総合大学）の学生諸君が、いろいろな幟のぼりを立てて出迎えて

くれていた。「若き日に汝の智能を磨け」と本学のモットーを記した幟もある。極東国立大学の日本語学科の学生たちの作品だろう。うれしかった。

モスクワから海運大臣が来てくださった。ウラジオストク市の要人たちもいて、そのうちのひとりが「ここはもはや軍港ではなく、修理港になりました」と教えてくれた。破損した船が多い理由がそれでわかった。歓迎行事や会食などで慌ただしい1日が終わった。

「ペレストロイカ（建て直し）」と並ぶ、ソ連の合言葉「グラスノスチ（情報開示）」を実感したのは翌日のことだ。港が一望できる丘の上に案内された。軍港でなくなり、軍事機密はほとんどないのだろうが、港の様子が隅々まで見える。さらに「写真も自由に撮影してください」という。私は、ボート、ヨットから軍艦、潜水艦など、あらゆる船に多大な関心がある。航空母艦・ノボロシスク（1982年竣工、ロシア海軍の太平洋艦隊に配属された。ソ連崩壊後は予備役に編入され、1997年解体）の実物を初めて見て興奮した。搭載機の少ない巡洋母艦もあった。太平洋艦隊には潜水艦が70隻、水上艦艇は100隻ありと聞いていたが、やはり港で見る限り、実働艦は少なかった。

新しい軍事基地のことを聞いてみると、ウラジオストクのずっと北方、第二シベリア鉄



1991年7月、ウラジオストクで第3回アジア環太平洋学長・研究所長会議を開催

道の終着駅、ソヴィエツカヤ・ガヴァニという港町に軍港の機能を分散中だという。

ウラジオストクが正式に開港したのは2年後の1991年（平成3年）。戦後初めての西側の船舶の入港となった私たちの訪問が契機になったのか、それは判然としないが、口火を切ったのは間違いないだろう。

その後、1991年（平成3年）、東海大学などが主導して始まったアジア・環太平洋学長研究所長会議の第3回会議でウラジオストクを訪問した。教育者、知識人が一堂に会し、学術分野の交流を通して新たな国際友好と国際交流を進めるのが狙いだった。会議参加者は13カ国60機関の91人、スタッフを含め

ると約2000人を数えたが、ウラジオストクには収容できるホテルがなかったため、富山港とウラジオストクを結ぶ定期フェリーを借りて洋上で会議を開いた。学術交流が世界平和に果たす役割などを確認し、その後は和気あいあいとした懇親会になった。

会議が終わった後、東海大学と極東国立大学と研究者の相互交流などを促進する覚書を結んだのも大きな成果だった。

ロシアとの交流は、野球や柔道などのスポーツ交流をはじめ書き切れない。民間の国際交流は、人間同士のつながりが基盤になっているので長続きする。それが実感である。

デンマーク校の再生

多彩に広がり、豊かな実りをもたらした国際交流だが、すべてが順風満帆に進んだわけではない。山あり谷あり、苦難もあった。

デンマークのシェラン地域のプレストに東海大学付属デンマーク校（高等部・中等部



1988年4月、東海大学付属デンマーク高等学校（TUBS）開校

Ⅱのちに中学部）が開校したのは1988年（昭和63年）4月だった。東海大学が海外に初めてつくった付属学校だった。

すでに触れたとおり、デンマークは父の重義が非常に愛着を持っていた国である。農業を主体にした豊かな国づくりや度重なる戦争で疲弊した国家の再建に大きく寄与した国民高等学校の教育の素晴らしさに感銘を受けた。東海大学建学の原点でもある。

デンマーク校では、デンマークをはじめ欧州各国に勤務する日本の駐在員の子弟を中心に数多くの若者が学び、巣立っていった。

しかし、だんだんと志望者が減ってきていた。最大の要因は、日本のバブル崩壊である。

駐在員の単身赴任が増えたため、就学する子弟が減る。学校は赤字が続いて費用負担が重荷になり、学内に「閉校にすべき」との意見が強まった。学園内に閉校対策委員会ができて、2006年（平成18年）8月に初会合が開かれた。

私は閉校に反対だった。本学ゆかりの地につくった学校であるとともに、国際交流を進めるうえでも大事な拠点だ。「東海大学の建学の精神の基盤になったデンマークにつくった学校なのだから何とか存続できないか」と考えていた。

存続を主張する人間も少数いた。その代表が、デンマーク校の開校に奔走した山田清志^{やまだ きよし}さんだ。現在の学長で当時、国際戦略本部副本部長だった彼を中心に「存続の手立てはないものか」と知恵を絞った。デンマーク校の開校当時、予定地を視察したり、開校が決まった際の契約をはじめとするさまざまな実務を担当したりしたこともあり、同校への愛着は人一倍だ。

原点に戻る

彼らの奮闘はすごかった。私も含めて学内には同校の運営のあり方をめぐってそれまでも議論があった。「日本の文部科学省の指導の下、日本の大学への進学を目指す日本式の教育ばかりでいいのか」というのが大きな検討課題だった。国際教育を重視する東海大学の理念と乖離した学校運営はできないと私は考えていた。

彼らが注目したのは「国際バカロレア」だった。スイスのジュネーブに本拠を置く非営利団体が運営する教育プログラムで、世界共通の大学入学資格証明書を付与している。当時150の国・地域の約4000の高校が認定を受けていたが、当時の日本ではまだ認知度が低かった。バカロレアの教育目標は「よりよい平和な世界を築くための人材教育」であり、本学の理念とも合致する。しかし、構想の実現は時間がかかるといったハードルがあり、断念せざるを得なかった。

次に目指したのは、ニューヨークの国連本部に併設されているインターナショナルス

クールのような学校づくりだ。国連に勤める職員や国連の各国代表部にいる人たちの子弟を教育する学校である。だが、この計画も、デンマークに国連の出先機関がなく、同国が難色を示したため、実現できなかった。

さらにはPKO従事者の子どもたちを教育する「平和の寺子屋」構想にリンクする学校建設の構想も持ち上がったが、やはり難題が多かった。

模索が続いた。だが、貴重なヒントは身近な人からもたらされた。デンマーク校の開校以来、いろいろな実務を誠実にこなしてくれた弁護士のだリス・デル・ハンセンさんから助言をいただいたのだ。

ハンセンさんは、私の父の教育理念に強く共感してくださっていた。彼は苦勞を続けている山田さんにこう話した。「国民高等学校にすればよいのではないか」

先にも述べたとおり、デンマークの国民高等学校は、戦争で領土を奪われ、疲弊した同国を教育で豊かな国に復興させた原動力だった。全寮制で教師と生徒が共同生活しながらともに学び、たくましい若者たちを育ててきた。この、教育による国づくりを実践した学校を範として、本学園は誕生したのである。

原点に戻るのだ。そのアイデアを聞いて私は即座に賛成した。ハンセンさんの言葉に目からうろこが落ちる思いだった。

ハードルは高く、調整することも多々あったが、それを乗り越えて2008年（平成20年）3月にいったん閉校した付属デンマーク校は、2009年（平成21年）9月に望星国民高等学校（BOSEIフォルクホイスコーレ）としてあらためて開校した。日本、デンマーク、アジア各国を中心とする数多くの若者が学んでいる。

トライアル・アンド・エラーを繰り返しながらも、最善の選択は足元のデンマークにあった。

ハワイ東海インターナショナルカレッジ

もうひとつ、ハワイ東海インターナショナルカレッジ（HTIC）にも触れておきたい。国際的な人材の育成も本学園の大きな目標だが、その核のひとつとなるカレッジだ。2年



2015年4月、ハワイ東海インターナショナルカレッジはハワイ大学ウエストオアフ校の敷地内に移転

制の短期大学である同校にも再生のドラマがある。

1992年（平成4年）、ハワイ州オアフ島にある州都ホノルルに創立して、2015年（平成27年）4月に同島カポレイにあるハワイ大学ウエストオアフ校の敷地内に移転した。米国の州立大学の敷地内に海外の大学が開校したのは初めてだった。米国西地区学・大学協会の審査をパスして基準認定を受けている。ハワイにも数多くの短大があるが、認証を受けているのは1割に満たない。

実は同校も慢性的な赤字に悩んでいて、40億円で売却して撤退する案が出ていた。私は撤退派の面々に「大事なことは何か、君た

ちはわかっていいのか」と珍しく怒鳴った。

大学経営は赤字では成り立たないが、それだけを理由にやめてしまうのは夢がない。ハワイに短大をつくり、運営に苦勞するのは当然のことだ。それでも、その地の文化や習慣を日本の若者に体験してもらい、国際的なセンスを持った若者を育てることが何より重要だと私は確信している。

グローバル人材の育成は本学園の目指すところである。わがままだったかもしれないが、私は断固として撤退を回避する手立てを考えることが大学人の責務だと信じてやってきた。

このほか、国際教育という点では、2009年（平成21年）にブラジルのマトグロッセ連邦大学と共同で在日ブラジル人教育者向けに「遠隔教育による教員養成講座」をスタートさせた。ブラジル人学校は日本に約80校あるが、教員資格を持たない教員も少なくないため、この講座で支援するほか、日本国内でのスクーリングの調整などにもあたった。

また、各国の政府留学生の受け入れにも力を入れており、アフガニスタン、オマーン、サウジアラビア、アラブ首長国連邦などから受け入れている。本学の大学院工学研究科では、英語だけで博士号が取得できるコースも設置している。こうした留学生受け入れのた

めのインフラ整備にも力を入れている。

私はこうした大学の施策推進に旗を振り続けている。「東海大学はグローバルな視野を持って活動するのが使命である」という理念に合致しているからである。「全人類の平和のために他人や他国との違いを認識して、相手のことを考え理解できる人」というグローバル人材を育てることにもつながると考えている。

ヨーロッパ学術センターの創設

国際交流の締めくくりとして、学術・文化交流についても、あらためて整理しておきたい。父からバトンを受け取り、大きく花開いた事例を中心に紹介しよう。

1970年（昭和45年）にはデンマークの首都コペンハーゲンの北に「ヨーロッパ学術センター」を創設した。東海大学が初めて海外につくった本格的な学術・文化の交流拠点である。デンマーク文部省国際局の協力により実現し、現在はデンマーク文化省の協力も



1970年9月、ヨーロッパ学術センターをデンマークに創設

得て多彩な活動を展開している。

ここを核にして、欧州各国の大学や機関などと交流協定を結び、研究者や学生の研究、勉強、留学を支援するほか、シンポジウムやセミナーも開いている。同センターの図書館には約1万7000の図書や映像資料を収蔵しており、日本の紹介などに役立てているほか、地元住民にも親しまれている。

同センターの活動を皮切りにしてさまざまな交流が実を結んだ。先に紹介したタイのモンクト王工科大学ラカバン校のほかにも、JICA（独立行政法人国際協力機構）の人材育成支援プロジェクトにさまざまなかたちで協力している。たとえば、「ラオス国立大

学工学部情報化対応人材育成機能強化プロジェクト」事業では、ラオス国立大学で情報技術者養成のためのカリキュラム開発などを進めている。

また、文部科学省、経済産業省、日本国際協力センターと連携して、カンボジア国人材育成支援事業や、アフガニスタン人材育成支援プロジェクト、アジア原子力人材プロジェクト、ベトナム原子力人材育成プロジェクトなども積極的に展開してきた。

協定による研究者や学生の相互交流は1000人を大きく超えている。なかでもモスクワ大学とは学術交流協定など、冷戦時代を含めて友好関係を息長く続けており、2023年（令和5年）に50周年を迎える。国際協力や国際支援は世界各地に及び、「世界平和を実現する人材の育成」という本学の建学の精神を具体化する取り組みである。

アジア・環太平洋学長研究所長会議

学術分野の国際交流で本学が誇る国際的な大イベントに「アジア・環太平洋学長研究



1987年8月、東京で第1回アジア・環太平洋学長研究所長会議を開催

所長会議」がある。父・重義と米国タフツ大学のジョン・マイヤー博士の提唱で1986年（昭和61年）12月に東京で準備会を開いた。米国、ソ連、中国、日本の大学学長が集まった。「アジア・環太平洋が直面する課題をどう乗り越えるか」という問題を各国の教育者や研究者が同じテーブルで話し合い、考えようというのが狙いだ。アジア・環太平洋の枠を超えて人類を取り巻く諸問題に対して知識人や科学者が英知を集めることに意義がある。

1987年（昭和62年）8月、東海大学がイニシアティブをとるかたちで東京・霞が関にあった本学の校友会館で第1回の会議を開催した。米中ソのほか東南アジアから18カ国

56機関の代表73人が集まった。メインテーマは「核時代に生きる知識人は、今なにをすべきか」だ。「教育」「社会・経済」「科学技術」の3つのセクションで熱心に議論を交わした。第2回は1989年（平成元年）8月、第1回と同じく本学校校友会館で「アジア環太平洋地域の平和と繁栄のために」を主題にして開催した。1991年（平成3年）には「地球環境保護と人類の未来について」と題した第3回の会議をウラジオストクで開いた。

その後も2005年（平成17年）の第10回会議まで、2〜3年に1度のペースで開催し、活発な議論を重ねるとともに各国の学長や研究所のトップと交流を深めてきた。私も総長として参加してきたが、いつも刺激を受け、交友関係も広がって非常に有意義な体験をした。

東海大学とともに



医学部の創設

東海大学が医学部をつくるまでには長い経緯がある。それは父の長年の悲願だった。父が初めて医学部の創設を公式な場で表明したのは1968年（昭和43年）9月、短期大学部静岡校舎の体育館の落成式だった。本学はすでに8つの学部を有する総合大学だったが、父は「真の総合大学を目指すためには、医学部を開設することを真剣に考える必要がある」と述べた。

電気通信研究所をやめた後、本学の教員になって間もない私もまったくの同感だった。しかし、資金面でも医師の確保の面でも簡単なことではない。大きな挑戦だった。

それから3年あまりを経た1972年（昭和47年）1月の新年初顔合わせの際、父はあらためて医学部開設の抱負を言明し、それを機に「医学部設置準備委員会」が発足した。

当時、日本医師会会長だった武見太郎^{たけみ たろう}さんを座長に、東京大学、慶應義塾大学、東北大学、九州大学などの名誉教授や教授の皆さんに参集していた^{たけみ たろう}だき、設置に向けた多角的な議論をお願いし、同年7月に「医学部設置懇談会」を設けて具体的な検討作業が始まった。

武見さんと父に加えて、医学部開設後に学部長になられる佐々木正五^{ささき まさご}さん、医学部付属病院が^さ開業してから病院長に就任される笹本浩^{ささもと ひろし}さんの両氏（ともに慶應義塾大学教授）などが議論に加わり、湘南キャンパスの現在の医療技術短期大学の建物を医学部の校舎にすること、平塚市民病院と連携して指定病院にすることを決めた。

ところが、1972年（昭和47年）6月に大学設置基準が厳しくなり、医学部用の校舎新設と付属病院の設置が義務づけられて方針転換を迫られた。このため、同年9月11日の医学部設置準備委員会で、神奈川県伊勢原市の本学野球グラウンドに校舎を新設することを急遽、決めた。

野球部が強くなりはじめた時期だったので、周囲の人たちは医学部開設に向けた父の強い思いに驚いた。私もそうだった。

同じ月の30日に文部省に設置認可申請書を提出した。認可までには通常1年あまりか



1975年2月、医学部付属病院（神奈川県伊勢原市）を開院

かるので、その間、付属病院の開設準備を急ぎ、伊勢原市内に正式に用地を確保し、建設計画を立てた。10万9890平方メートル、地下1階、地上10階で病床1100の大規模病院である。

申請から15カ月を経て開設認可が下り、1974年（昭和49年）4月に医学部を開設した。振り返ると、まさに大事業だった。

1960年代の半ばから医師不足が言われ、無医村が問題になった。病院でも長々と待たされたあげくに「3分診療」などと批判された。こうした医療をめぐる環境が私学の医学部開設の呼び水となったが、その後、私大医学部の不正入試などの不祥事があり、開設にブレーキがかかった。そんななかでの医学部創設だった。

その後の医学部は、1988年（昭和63年）に独自のCOS（Case Oriented System）という問題解決型の新カリキュラムを導入するとともに、その年の入学試験から多様な人材に門戸を開く学士編入学制度を開始。1997年（平成9年）からは診療参加型臨床実習（クリニカルクラークシップ）を導入したほか、2003年（平成15年）には講座医局制を廃止し、一元管理による一貫した教育指導体制を築くなど、他に先駆けた制度の導入を進め、成長と進化を続けた。

また、1983年（昭和58年）に付属東京病院を、その翌年に付属大磯病院（2023年に事業を譲渡して閉院を予定）を、また2002年（平成14年）に付属八王子病院を開院した。これらの付属病院と連携して、地域の「頼れる医療機関」に育っている。基礎医学、臨床医学、看護の三位一体の充実した医療を一貫して推進している。

医学部にも、東海大学の建学の精神が息づいている。他の学部と連携して、自らを磨き、他者を尊重する「人間観」、現在や過去から学び、未来を考える「歴史観」、あらゆる国や民族と共存する「世界観」をしっかりと身に付け、生命の尊厳を胸に刻み、患者さんへの敬意を忘れない「良医」を目指す教育を徹底している。

もちろん治療に全力を尽くすが、「薬石効なく」となっても患者や家族の方々に感謝される、信頼を基盤にする医療を実践できている、と自負している。医療の技能を磨き、最新の知見を備えた名医を目指すことも大切だが、良医にも名医にも共通するのは、患者と医療に誠実に向き合う姿勢であろう。

熊本に農学部

父の生まれ故郷である熊本の九州東海大学に農学部をつくったのは1980年（昭和55年）のことだ。地元の農業団体などからの熱心な要望を受けて、父の故郷への恩返しのためで決断した。

九州東海大学の前身は1964年（昭和39年）にできた東海大学短期大学部（熊本校舎）で、1973年（昭和48年）に4年制大学に改組し、さらに2008年（平成20年）に東海大学と統合して、東海大学の九州キャンパスになった。



デンマークの農場で干し草作業

私は1973年（昭和48年）、4年制になると同時に学長に就いた。工学部に電気工学、機械工学、建設工学を置いて3学科でスタートした。その後、情報工学やシステム工学などの学科を新設して拡充を続けてきた。

父・重義がデンマークの青年教育の基盤になった国民高等学校に感銘を受けたことはたびたび紹介した。戦争で疲弊した国を教育と農業で立て直したのだ。私も農業を軸にした青年教育の大切さは実感していた。しかし、農学部の新設を心に決めたものの、私は農業の現場を知らない。農業体験といえ、戦時中の勤労動員で埼玉県深谷

の農家で農作業の手伝いをしたことがあるだけ。そんな私が農学部創設の旗を振るのはいかなものかと考えた。

そこで、「デンマークに行こう。農業の現場を体験しよう」と思い立った。周囲はびっくりして「そこまでしなくても」との声もあったが、私の心は決まっていた。職員に随行してもらい、現地で通訳を頼んだ。

夏だった。酪農家の家に泊ってもらい、牛乳の集荷からチーズやバターなどの乳製品づくりを体験したほか、牛を枝肉にしたり、肉の加工品の製造を手伝ったりした。農業に携わる人たちの暮らしや気持ちにも触れた。つらいことも多かったが、いい経験だった。農業者から見れば、ほんの疑似体験に過ぎないが、農業の苦労や醍醐味を垣間見ることができたと思っっている。

ところが帰国後、「灯台下暗し」といべきか、私の側近から農学部新設に異論が出た。「いまさら農学部をつくって就職先はあるのか」というのである。食糧問題は日本のみならず国際的な大問題だ。農学部で学んだことを生かして農業に従事したり、企業や研究機関などに勤める若者を増やしたりすることができれば国益にもかなうし、国際貢献にもつ



1973年4月、九州東海大学開学、入学式での校旗授与

ながると懸命に説得した。

その甲斐あって学内の了承は得たものの、学部の新設には手間がかかる。まず、文部省の認可を得るのが大変だ。資料をつくり、説得や根回しに大忙し。大学のスタッフとともに連日深夜まで申請書類づくりに忙殺された。やっと認可が下りてからも、創設準備ですることが山ほどあった。

農学部最初の新入生を迎えた入学式で、私は次のように挨拶した。

「科学技術の進歩は単に科学者や技術者のみの問題ではなく、政治、経済、産業、日常生活から地球環境、世界的人類の生存問題にまで大きく影響を与えることになってきた。大学における学問研究も、広い視野での協力と交流が必要になってくる」

農業の基礎知識や農業技術を修めるのも大事だが、農業をワイドな視野でとらえ、世界に貢献する人材に成長してほしいとの願いを込めた。

農学部は順調に動き出したが、2016年（平成28年）4月の熊本地震で農学部の学生3人が亡くなった。その知らせを聞いたとき、総長室の椅子にへたり込んで、しばらく立ち上がれなかった。希望に燃えて学んでいた若者を失うのはまさに痛恨の極みだった。ご遺族の悲しみを思うといまも胸が痛む。

農学部はこれからさらに拡充を図るつもりだ。熊本県が阿蘇くまもと空港周辺の産業活性化に力を入れており、農学部も2023年（令和5年）4月に空港近くの「臨空キャンパス」に移転する。

情報技術センター

「情報技術センター」は、東海大学が誇る重要な組織のひとつである。情報分野における

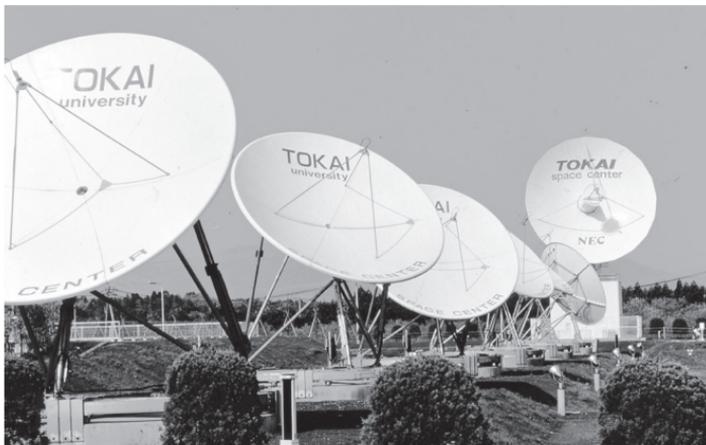
研究開発の成果を内外に還元することを狙いとし1974年（昭和49年）に発足させた。独自に開発した高度な画像解析システムを駆使して、さまざまな分野で調査や研究にあたってはいる。

一例として、地球観測衛星から受信した各種データを処理・解析してつくった画像が挙げられる。テレビ番組や博物館の展示のほか、地理の教科書や地図帳など、さまざまなところで使われている。

また、鎌倉の大仏の腐食状況の調査や、奈良の高松塚古墳の状態の把握・分析などにも役立っている。人工衛星のデータを使ってエジプトで新たなピラミッドを発見するといった文化財の保護や考古学にも大きく貢献している。

1986年（昭和61年）には世界の大学で初めて、人工衛星のデータを直接受信できる「宇宙情報センター」を開設した。いまでは米国地質調査所が運用している地球観測衛星「ランドサット8号」のデータを受信してウェブ上で公開し、官公庁や研究機関、個人などに提供している。

地球全体を対象とした自然科学分野の研究は近年ますます重要になってきている。地球



1986年11月、宇宙情報センター（熊本県上益城郡益城町）を開設

と国家、地球と地域、地球と人間とのかかわりを見据えて、多彩な社会ニーズに対応する基礎研究や、さまざまな研究機関との共同研究、メディアへの情報提供などを通して一段と有用な事業を拡大していきたい。

ル・マン耐久レース

「万機公論に決すべし」（「五箇条の御誓文」第一条）。広く開かれた議論を踏まえて意思決定しようという意味だ。総長として「学内世論」を尊重しようという決意表明なのだが、それを押し切って進めたプロジェクトもいくつかある。

大学の活性化のために必要だと判断したら、果敢に決断した。

その原点になっているのが、父の言葉である。

「変えるべきものは変え、変えてはいけないものは変えない」

変えてはいけないものは、世界平和に貢献する若者を育てるといふ建学の精神を具現化する施策である。

フランスの世界的な自動車レース「ル・マン24時間レース」に参加したのは2008年（平成20年）6月。「本学にとつてどんな意義があるのか」「資金がかかりすぎる」などの反対意見が学内に多かった。だが、私は挑戦する意義があると考えて参戦を決めた。

この年で76回目となるル・マンの長い歴史のなかで、大学のチームの参加は初めてだった。私は「工学教育に寄与するはずだ」「これまで取り組んできたモータースポーツ振興の集大成になる」と考えていた。

レースはいくつかのクラスに分かれているが、参戦したのは世界的な自動車メーカーのアウトディヤプジョーなども参加する「LMPクラス」だ。世界から20台が参戦した。

出発前に在日フランス大使館が壮行会を開いてくれた。席上、駐日大使が「フランスの

大学は何をしているのか」と憤りながら、われわれの挑戦を高く評価して、エールを送ってくださいました。英国のタイムズ紙も電子版で賛意を記した記事を掲載するなど内外で話題になった。

工学教育の面でも価値があるという助言もいただき、「工学教育の集大成」と位置づけて学内プロジェクトをスタートさせた。

だが、ハードルは高かった。健闘及ばず、17時間39分44秒363でリタイア。原因を調べてみると、どうやらドライブシャフトと変速器のあいだのベアリングが壊れたらしい。それでも、こうした挑戦を果たしたことは財産になったと思う。

ソーラーカー開発——実践的な工学教育のチャレンジ

自動車を使った教育では、ソーラーカーで世界的な活躍を続けている。工学部の木村英樹教授の指導の下、学内に「チャレンジセンター・ライトパワープロジェクト」をつく



2009年10月、ソーラーカーの世界最高峰レースで初優勝

り、ソーラーカーの開発を進めた。2009年（平成21年）には世界最高峰のレースである「グローバル・グリーン・チャレンジ ソーラーカー部門（現ワールド・ソーラー・チャレンジ）」で初優勝。その後も毎年、好成績を上げている。

東海大学がソーラーカーの研究開発に乗り出したのは、1991年（平成3年）5月のことだ。本学総合研究機構が次世代エネルギーとしてソーラーエネルギーに注目し、ソーラーカーとソーラーボートの試作委員会を発足させた。私は実践的な工学教育に資する新たなチャレンジとして大いに評価して応援した。

1992年（平成4年）、工学部の教員と学

生を中心に手づくりで記念すべき1号車ができた。まずはスピードより実用化を意識して製作し、各種データの収集にあたった。長さ6メートル、幅2メートル、高さ1.1メートルの2人乗りの四輪車である。

1993年（平成5年）には走行性を考えて流線形のボディにした2号車を開発。世界で初めて素材にチタンを採用した。サイズは1号機とほぼ同じだ。コーナリング特性を考えて四輪は変えなかったが、1人乗りにした。このクルマで、世界的なレースであるワールドソーラーチャレンジ（WSC）に初めて挑戦。参加した52台中18位で完走した。平均時速40キロメートルを記録した。

1996年（平成8年）には、流線形のまま三輪にした3号車を開発して再びWSCに挑んだ。平均時速は45キロメートルに上がったが、46台中15位だった。

総合研究機構のプロジェクトが終了した1997年（平成9年）以降は、2つの開発チームに分かれた。工学系学部学科による共同研究チームと、学生有志でつくる東海大学ソーラーカー研究会だ。それぞれがノウハウを磨いて研究開発に力を入れた。私も引き続き注目して応援を続けた。

その後、学生有志の研究会が開発したハーフサイズのソーラーカーが2001年（平成13年）から2003年（平成15年）まで国内レースで3連覇を果たし、文部科学大臣賞に輝いた。工学部の共同研究チームのクルマも進化を重ね、WSCで平均時速70キロメートルを記録した。

2006年（平成18年）4月には東海大学チャレンジセンターができて、ソーラーカーの開発に取り組む2チームが合体、電気自動車や人力飛行機などの開発にあたる学生たちとも連携して、先に紹介した「ライトパワープロジェクト」が発足した。

その後も、国内の有力メーカーと提携して機材を積み込んだり、民生用太陽電池パネルを採用したりして、世界的なレースで優勝するなど好成績を上げ続けている。平均時速は100キロメートルを超え、走行時間も最長記録を次々に更新した。本学の工学教育の充実に貢献しただけではなく、省エネや環境保全にも役立つソーラーカーのレベル向上にも寄与している。



1965年、FM東海第一副調整室（港区の発明会館）

FM東海の開局

工学部にわが国初の原子力専攻を創設（1956年）するなど、本学はチャレンジ精神が旺盛だと自負している。

チャレンジのひとつ、日本初の民間FM放送局「FM東海」の開局にもドラマがある。

「FM東海」の前身は、父の重義が1958年（昭和33年）につくった超短波放送実験局である。通信事業に精通している父は、短波（FM）放送を通信教育に活用できないかと考えていた。中波と比べて雑音がなく、ほとんど利用されていない波に注目し

たのだ。

NHKが1969年（昭和44年）にFM放送局を開局する前で、まさに黎明期だった。当時の郵政省の許可を得て1958年（昭和33年）12月に本学の東京の渋谷校舎（旧代々木校舎）に開局し、翌年から付属高校向けの通信教育を始めた。さらに1960年（昭和35年）には、広告などの営利事業ができる超短波実用化試験局となった。これが「FM東海」の始まりである。

FM放送は将来有望とされていたが、当時はまだ放送局が少ないため、FM放送を聞くことができるラジオが国内にはほとんどなかった。数少ないメーカーも輸出用に製造していた。

そうしたなか、教育放送だけでなく、音質のよさを生かした音楽番組にも力を入れた。スタッフはリスナーの獲得に懸命だった。FM放送が受信できるラジオを喫茶店に置いてもらうなどして徐々にリスナーを増やしていった。やがてFMも聞けるラジオが次第に普及し、「FM東海」の運営は軌道に乗りはじめた。

ところが1968年（昭和43年）、郵政省からクレームが入る。実用化試験局のみまで

営業放送を続けるのはおかしいというのである。同省は今後拡大するであろうFM放送の実用化における主導権を握りたいとの意向が強く、この分野で先行している「FM東海」を牽制する狙いがあったのだとみられる。

両者の話し合いは平行線が続いた。郵政省は放送免許の再交付を認めず、この年の6月末で放送免許は失効してしまふ。しかし、「FM東海」は放送を続けたため、郵政省は電波法違反の罪で東京地検に告訴。「FM東海」側も郵政省を虚偽告訴罪で告訴するとともに、東京地裁に免許取り消し処分の停止を求める行政訴訟を起こした。

地裁は、「FM東海」側の申し立てをほぼ認める決定を出した。この結果を受けて再び両者が交渉のテーブルに着き、「FM東海」が出資者を増やして純民間のラジオ局に移行することで存続が決まった。そして1970年（昭和45年）4月、FM東海の事業を継承するエフエム東京が誕生した。

こうしてさまざまな問題を乗り越えてきたことは、メディアの社会的なあり方や役割について、さらにはメディアの独立性について多くの課題を考える手がかりになる。このことは本学の文化社会学部広報メディア学科の教育や研究のテーマとしても引き継がれてい

る。2005年（平成17年）にスタートしたプロジェクト「こちらラジオ番組制作部」では、同名のラジオ番組を湘南校舎のある平塚を中心としたコミュニティ放送局「FM湘南ナパサ」（78・3メガヘルツ）に乗せ、週に1回、社会に向けたメッセージを発信し続けている。

スポーツ教育

私はスポーツ万能を自認している。やるのも見るのも大好きだが、運動神経は中の上ぐらい。だが、スポーツは、心と体を鍛えてくれたうえに、いろいろな縁を結んでくれた。

たとえば野球。東北帝大の野球部で東京帝大と試合をして0対17で負けた話を書いたが、東京帝大のピッチャー、山崎諭やまざき こととさんは、切れのいいカーブが武器で、私も三振を喫した。

山崎さんは日本興業銀行に勤めた後、長野県茅野市の東海大学第三高等学校（現付属諏訪高等学校）の校長に就任され、野球部の指導にも熱心で、見事に甲子園出場を果たした。

そんな私が全日本大学野球連盟や日本学生野球協会の会長になったのも奇縁である。野



2021年8月、メダリストとともに第32回オリンピック競技大会の報告をする山下泰裕副学長・体育学部教授（JOC会長）と井上康生体育学部教授（男子柔道部副監督）

球や柔道などを通して国際交流にも力を入れ、微力ながら国際平和に貢献できたと自負している。各国の若者が真剣勝負を通して友情を育んだのがうれしい。

東海大学はスポーツ教育にも熱心だが、勝つことを至上命令に、スパルタ式に学生をしごく指導者はいない。優れたアスリートの育成だけが目的ではなく、健全な精神と肉体を持った立派な社会人を育てるのを最大の目標にしている。

スポーツは強制されてやるものではない。ひとりひとりが目標を掲げて、

正しい指導の下で自主的に鍛練を重ねる。勝つことも大事だが、負けることから学ぶことがある。

柔道の山下泰裕君やましたやすひろも挫折を乗り越えてきた。私は1986年（昭和61年）から1991年（平成3年）まで本学の柔道部長をした。山下君は1988年（昭和63年）に男子柔道監督になった。「柔道をする目的は何か。勝つことだけを目指すのではなく、柔道を通して国際交流に貢献することが大事。それは東海大学で教わった」と話している。

男子柔道

2020年（令和2年）夏に開幕するはずだった東京オリンピック・パラリンピックは、新型コロナウイルスの感染拡大で1年間延期が決まった。2021年（令和3年）になってもコロナ禍が収まらず開催が危ぶまれたが、厳重な感染対策や観客を入れないなどの対応をとって無事に開催された。日本選手の活躍をテレビで見ながら「開催されてよかった」

と実感した。1年間の辛抱の時期を経て、ひのき舞台上で見事なパフォーマンスをした皆さんに拍手を送った。

東海大学のOBで現在、副学長の山下君は日本オリンピック委員会（JOC）の会長で、国際オリンピック委員会（IOC）の委員だ。開幕までは大変だったろうと思う。山下君は大学に来ると総長室にも来てくれた。「ご心配をおかけしています。どんなことが起こるか読めないのです、あらゆる可能性を想定して準備しております」と話していた。無事に閉幕し、山下君も肩の荷を下ろしたことだろう。

オリンピックで男子柔道をはじめ本学の在校生や卒業生が活躍したのもうれしかった。男子柔道の監督を務めたOBの井上康生君いのうえこうせいは金メダル5つを獲得した男子柔道を見事に率いて、その優れた指導力とマネジメント能力が賞賛された。在学中に2000年（平成12年）のシドニーオリンピックの柔道男子100キロ級で金メダルを取った井上君は入学した当初から見ているが、「立派な大人になったなあ」と思う。冷静沉着で闘志あふれる指導者になった。女子柔道のコーチを務めた塚田真希君つかたまきも健闘した選手たちを率いた。彼女も本学の卒業生である。彼女らのことはあとでまた書きたい。

オリンピックで思い出すのは1980年（昭和55年）の7月19日から8月3日まで16日にわたって開かれたモスクワオリンピックだ。当時、ソ連によるアフガニスタン侵攻に抗議して米国が大会のボイコットを提唱。日本も参加を見送った。

その開会式に私は招待された。父の代から長年にわたってソ連との交流を続けてきたおかげだが、隣に座ったのは、パレスチナ解放機構（PLO）のヤーセル・アラファト議長だった。整然としていながら華やかな式典だったが、日本の選手たちがいないのが淋しかった。

この大会で金メダルが確実と言われていた柔道の山下君ら選手たちが東京の日本オリンピック委員会の本部で涙ながらに参加を訴えるのを、大学の執務室のテレビで見て涙が出た。山下君は当時、東海大学大学院の学生だった。熊本出身で、九州学院高等学校で活躍する有望選手だったが、もうひとつ壁を破れずにいた。彼を2年生の2学期から東海大学付属相模高等学校にスカウトしたのが、同じ熊本出身で柔道の振興に尽力していた父だった。その後、厳しい鍛錬を重ねて無敵の柔道選手に育った山下君だけにボイコットは無念だったろう。

そして4年後、私はもう一度泣いた。ロサンゼルスオリンピックの柔道男子無差別級で彼は見事に金メダルを取ったのだ。左脚の肉離れを起こしながら決勝で、エジプトのモハメド・ラシユワン選手を横四方固めで破った。素晴らしい試合だった。勝った瞬間の山下君の感極まった表情が忘れられない。

失意を乗り越えての栄冠だった。彼は中学3年生のときに作文で、「オリンピックで優勝し、メインポールのまん中に日の丸をあげ、君が代の演奏を聞きながら、空を見上げた」と書いた。その少年の日の夢を果たしたのだ。表彰式で彼に金メダルを授与したのは、国際柔道連盟会長だった父である。山下君も父も感無量だったろう。

女子柔道と高校野球

女子柔道部は私が育てたと思っている。男子柔道部よりずっと後発だが、2000年（平成12年）7月、全日本学生女子柔道優勝大会で念願の初優勝を果たした。千葉県立武道



2021年12月、男女柔道部の2大会での好成績を報告する塚田真希女子部監督（体育学部准教授）

館で妻と一緒に汗だくで応援した。準決勝で筑波大学、決勝で帝京大学を破った。

のちに2004年（平成16年）のアテネオリンピック柔道女子78キロ超級で金メダリストになる塚田真希君が大活躍した。茨城県の土浦日本大学高等学校を卒業したばかりの1年生。その後、彼女は東京女子体育大学の女子柔道部の監督を経て、いまは本学の女子柔道部の監督を務めている。日本代表チームのコーチでもある。

初優勝のお祝いに部員たちにポケットマネーでハワイ旅行をプレゼントした。自宅に呼んで食事会をしたこともあるが、ものすごい食欲にびっくり仰天。ふんだんに用



2019年1月、原辰徳読売ジャイアンツ監督の2018年度野球殿堂入りを祝う会で懇談

意した食べ物があつという間になくなった。旺盛な食べっぷりは見ていて爽快だったが、妻たちの手間も考えて、その後は近所の焼き肉店で催すことにした。

付属校の野球部では、福岡県立三池工業高等学校を1965年（昭和40年）に夏の甲子園で優勝に導いた原貢^{はらみつぐ}さんを翌年、東海大学付属相模高等学校の監督に迎えた。

以来、甲子園を度々わかせて1970年（昭和45年）に夏の大会で優勝。「どうかいとおおずもう」と読んでいた人たちもいた東海大相模が全国区になった。原さんの長男で現在、読売ジャイアンツ監督の原辰徳^{はらとくのり}君も付属相模高校、東海大学の卒業生だ。

そのほかにも強い運動部はたくさんある。寄る年波で最近はもっぱらテレビ観戦だが、駅伝やラグビーなど東海大学が頑張っているとつい応援に熱が入る。

学部再編——カレッジ構想

最後に、いま進めている学部再編と新たに創設した学部について触れておこう。

東海大学では約3万人の若者が学んでいる。2022年度（令和4年度）には、6つの学部を新設して合計23学部、62学科・専攻になった。少子化が進むなか、大きく成長した本学をどうやって活性化するか。学園建学80周年を迎えるにあたり、抜本的な学内改革を進めてきた。明日の歴史を担う強い使命感と豊かな人間性を持った人材を育てるといふ建学の精神を具現化するのである。

「国づくりの基本は人づくり」を実践するため、議論を重ねてきた。名づけて「日本まるごと学び改革実行プロジェクト」。私は陣頭指揮を執らず、長男で理事長の義昭よしあきと学長の

山田清志さんを中心に学内の幹部の皆さんが衆知を集めて具体策を練ってきた。

もちろん、総長の私が、改革の最終的な責任者である。父から引き継ぎ、自らの信条としていたる次の言葉がすべてだ。

「時代の変化に合わせて、変えるべきものと変えてはいけないものをきちんと峻別する」
文系、理系を問わず、個性を尊重し、内外の環境変化に対応して、各学部により自由度が高いカリキュラムに変えていく。それが改革の基本姿勢である。

本学には5つのキャンパスがある。東京、湘南、静岡、熊本、札幌である。80周年を機に地域や学問分野ごと「カレッジ」を置き、学部・学科の数が多い東京と湘南で7つ、静岡、熊本、札幌をそれぞれ1つ、合計10のカレッジとした。日本の大規模な大学では初の試みだ。ユニバーシティ（総合大学）のなかに、ブランチとして比較的規模が小さなカレッジをぶら下げて緩やかな連合体を形成する。父や私が長年志向してきた「スモール・ユニバーシティ」を具現化する改革である。かなり大胆な挑戦だが、「責任は私が取る。頑張って進めてください」と激励した。

本学の教員と学生の比率は1対18・1。大きな大学では慶應義塾大学の1対14に次いで

小規模教育を実現している。大学経営としてはコストがかかるが、カレッジ構想によって「小さな大学」だからこそできることに挑みたい。東海大学建学の原点に立ち返る試みであり、時代の要請でもある。

学生のさまざまな個性や志向に対応できるのもメリットだ。カレッジのなかで学部・学科の相互交流を進め、学生たちの意欲に応える。従来型の縦割り教育ではなく、横の連携を強めていく。たとえば、東京キャンパス（渋谷校舎、高輪校舎）には、社会科学系の4学部（政治経済学部、経営学部、国際学部、観光学部）があるが、そこに既存の情報通信学部を連携させて横串を通す。文系の各学部のなかに理系が入ることで刺激と効用が生まれる。ビッグデータやAI（人工知能）など、学生たちが新たな学問や研究領域を広げるきっかけになるだろう。

こうした横串方式は、カレッジ間でも進めていく。たとえば、政治経済学部の学生が、熊本の農学部で前期だけ学ぶ。言ってみれば、回遊型の教育へのシフトでもある。

コロナ禍で導入を拡大したリモート授業は今後、より戦略的に活用したい。対面授業が大事なことは言うまでもないが、リモート授業には、どこにいても全員が教室の最前列に

着席しているようなかたちで講義を受けられるというメリットがある。

米国などで導入されている「アクレディテーション」は、第三者機関による質保証制度で、認定されたプログラムならどの大学で受講しても同等の単位を与える仕組みだ。本学でもゆくゆくは科目ごとのシラバス（講義内容）を統一することで、どこのカレッジで受講しても単位が取得できるシステムを実現したい。

新学部について

2022年度（令和4年度）に新設した学部は、次ページの表のとおりである。

そのなかでも、経営学部、国際学部の学生は、1、2年生の教養課程を湘南で、3、4年生の専門課程を東京で学ぶスタイルにする。両キャンパスを一体化するのである。通学が大変な学生のために寮も整備する計画だ。カレッジ構想で、目指す文理融合を実現できると考えている。

本学は建学当時、全寮制だった。1955年（昭和30年）の代々木校舎（現東京キャンパス渋谷校舎）では実現しなかったが、1963年（昭和38年）に開設した広大なキャンパスの湘南校舎（神奈川県）には、地方出身学生のために「望星学塾」「体育望星学塾」「女子望星学塾」の寄宿舎をつくった。戦前に私塾「望星学塾」を開設し、寮生を受け入れて、ともに研究し、学び合った父の強い意向だった。原点に立ち返る意味でも評価できる試みだ。

文理融合学部は、文系・理系にとらわれな
い、東海大学の建学の
精神をストレートに
表す学部だ。経営学科、
地域社会学科、人間情
報工学科の3学科で構
成し、熊本キャンパス
熊本校舎に開設した。

東海大学 2022年度学部一覧（*は新設）

学部	校舎
文学部	湘南
文化社会学部	
教養学部	
児童教育学部*	
体育学部	
健康学部	
法学部	湘南、渋谷
政治経済学部	
経営学部*	湘南、高輪
国際学部*	
観光学部	
情報通信学部	
理学部	湘南
情報理工学部	
建築都市学部*	
工学部	湘南（医工学科以外） 湘南、伊勢原（医工学科）
医学部	湘南、伊勢原
海洋学部	清水
人文学部*	
文理融合学部*	熊本
農学部	熊本、阿蘇
国際文化学部	札幌
生物学部	



1964年2月に望星学塾、1967年3月に円形食堂を設置



望星学塾の塾生は朝のデンマーク体操に参加（1960年代の湘南校舎）

湘南キャンパス湘南校舎に誕生した児童教育学部も、時代の要請に応える注目の学部のひとつである。少子化が加速し、いじめや育児放棄、家庭内暴力など子どもを取り巻く環境は厳しい。貧困も深刻な問題だ。政府は2023年（令和5年）に「こども家庭庁」を創設して教育行政の司令塔にすることを決めている。児童教育学部では、子どもたちの成長を継続的に見守り、健やかな成長を家庭とと

もに喜ぶ教育プログラムを用意する。「保幼小」一体化が大きな特徴で、長い目で子どもたちの個性、強み、潜在力を伸ばすことを目指している。

また、家庭や地域との連携も重要だ。父母や地域の人たちと一緒に子育てに参画しながら、保育士や幼稚園、小学校の教員資格を取得する。たとえば学内につくる「あかちゃん広場」などで現場に密着した保育体験もできる。東海大学としても健全な子どもたちの育成は大事な使命だ。児童教育学部はそのためにも大事に育てていきたいと考えている。

そして、建学の地である静岡キャンパス清水校舎では、人文学部を新設した。すでに海洋学部にあった環境社会学科と海洋文明学科を統合して人文学部とした。私はかねて「海洋学部は水産学に傾斜しすぎている」と思っていた。もちろん、水産学は大事な分野だが、他大学にも学部がある。加えて、海洋学という、東海大学が日本で初めてつくった学問領域をもっと意欲的に開拓すべきだ。私がかつて海洋文明学科の創設を提唱したのもそのためだった。

人文学部を創設した意義は非常に大きい。人文学とは「自分学」であると私は考えている。変化に対応するだけでなく、海や地域や人間を相手に、新しい文化や価値観を自らの

手で創造してほしい。海洋資源の保存や利用、海上輸送、さらには航海の安全まで、研究する範囲はきわめて広い。

道の途中

こうした学部再編、新しい学部の創設を通じて、学園全体の基盤をさらに強固にした。東海大学、付属・提携校も含めた在学生の保護者の組織である東海大学連合後援会、卒業生の保護者で組織する白鷗会と不知火会、そして卒業生の同窓会。こうした組織の結束は全国の大学のなかでも屈指の強さを誇っている。

これらの縦糸、横糸、斜めの糸をいっそう強固にすることで大きな力が出る。加えて、文化講演会やスポーツ教室、東海大学海洋調査研修船「望星丸」の一般公開などの地域活動を通して本学園の基盤をより強くしていきたい。

学園のなかの縦の線と横の線も大事だ。認定こども園、小学校から大学、大学院までの

一貫教育が縦の線で、各地の学校の連携が横の線だ。学園のみならず、日本の教育全体を視野に入れて考えていこうと思っている。

新型コロナウイルスの感染拡大で国際交流に大きな影響が出ている。国をまたいだ往来がしにくくなったし、米国と中国の関係がギクシャクしており、ロシアのウクライナ侵襲など国際社会でも新たな軋轢が起きている。感染拡大が収束しても、国際関係には大きな変化が起こるだろう。

だが、私たちが続けてきた民間の草の根交流で培った絆は、国同士の関係がどう変わっても変わらない。

学園の成長こそ、我が誇り



現代文明論

東海大学には「現代文明論」という特色ある講義がある。本学の存在意義ともいふべき、全学の教員の英知を結集した講義である。学ぶということは、知識を頭に詰め込むだけではない。学問を通して自ら考え、人生観や歴史観、世界観などを培って社会や世界に貢献することだ。現代文明論はそのための礎になり、ヒントになる。1958年（昭和33年）4月



「現代文明論」の講義を行う著者

に始まって連綿と続いている。

当時の本学はまだ学園としての陣容が十分に整っておらず、教員が足りなかった。そこで学長だった父の松前重義も講座を受け持たざるを得なかった。工学部で「電気通信概論」を講じていた父は、得意分野の電気通信の理論などを講義しているうちに、科学と宗教の軋轢について熱弁を振るいはじめた。ニコラウス・コペルニクスやガリレオ・ガリレイとキリスト教の総本山スコラ学派との対立について論じ、話はヨーロッパの歴史と現状に及んでいった。学長自らの熱のこもった講義に学生たちは強い感銘を受けた。

そして翌年、「現代文明論」は教養科目のひとつとしてカリキュラムに加えられて、若い学生諸君の精神を耕す大事な授業になった。総長や学長をはじめ教授陣が専門外のことも含めて「学生の未来の指針になる講義をしよう」と情熱を持って取り組んでいる。

この講座を創設したころ、当時の文部省は何だか胡散臭いと感じていた節がある。だが、視察などを通して「新鮮で柔軟な科目」と評価してくれるようになった。私たちも旧態依然とした大学のカリキュラムに新しい風を吹き込んだと自負している。

コペルニクスは地動説を唱え、頑なに天動説に固執する宗教界に激しく弾圧された。「地

球は回っている」と唱えたガリレオ・ガリレイも同じ目に遭った。だが、2人ともひるまず、主張を曲げずに、のちの世界の科学の発展に多大な貢献を果たしたのである。

私が東海大学、九州東海大学、北海道東海大学、短期大学部で講義してきた「現代文明論」も、コペルニクスから現代までの科学技術の発展の歴史を振り返り、先人たちが世界にどのような役割を果たしたのか、またこれからの課題とどう向き合い、どのような未来の文明の姿を描き出すのかを学生たちに問いかけてきた。すぐに答えの出ることではない。学園で学び、社会に出て働いて、さらに視野や知見を広げて時代の課題に立ち向かってほしいと願っている。

私は21世紀を因果律崩壊の時代とみている。原因があつて結果が生じるというこれまでの科学の世界とは様相が変わってきて、原子、電子、陽子、中間子の発見でこれまでの常識は崩れた。これらの超微細な物質は法則性のない不規則な動きをするからだ。因果律を社会現象に応用したマルキシズムも崩壊しつつある。科学の分野では地球環境、核問題、合成化学、AIなど、社会問題では戦争、民族紛争、ウイルスの蔓延など、人間が制御するのが難しい問題が次々に生じている。人類の英知と倫理でいかに乗り越えるのか。なかな

か答えが出ない難題に立ち向かう覇気を若者たちに持つてほしいと願って講義をしている。この「現代文明論」は学園の伝統であり、これからも継続していきたい。

父と母を送る

父は1991年（平成3年）8月25日に永眠した。享年89。1901年（明治34年）に生まれたから、明治、大正、昭和、そして平成の4つの時代、20世紀をほぼ丸ごと生き抜いた。わが父ながらスケールの大きい人だった。

高い理念の下で東海大学を建学し、学園として大きく成長させてきた。教育者、官僚、科学者、衆議院議員など、さまざまな顔を持っていたが、理念や政策などを企画・立案し、実践していく事業家の顔も持っていたと私は思っている。人脈が非常に広い。応援してくださる支援者を惹きつける魅力もあったのだ。

私が東北帝国大学に進んだのも、東海大学の教員になり学園運営の中枢を担ったのも、

参議院議員になったのもすべて父の導きだったが、父の敷いたレールの上を唯々諾々と進んできたのではない。父の勧めを自分で判断して人生の選択をしてきたのである。そのおかげで私の人生は豊かで意義あるものになったと感謝している。

ただ、学園の運営に携わるようになってからは、父がぶち上げる大胆な発想、いわば「大風呂敷」の後始末に苦勞したのも事実で、振り返ると大変な思いもした。

そもそも父と私は性格がずいぶん違う。強いリーダーシップの下、精力的に事を進める父に対して、私は合議で進めることを基本にしている。

私は酒が好きというほどではないが、少々呑むことは呑む。しかし、父は40歳を過ぎるまで呑まなかった。ところが、たしなむようになると夜の街に足しげく出入りしたようだ。仕事も忙しいから午前様は当たり前だった。私は父と違って「夜のクラブ活動」をほとんどしない。深夜に帰宅することもめったにない。

父は亡くなった年の2月に入院して8月に逝った。回復に望みをかけていたが、叶わなかった。通夜は父が武蔵野市西久保の自宅の敷地に創設した望星学塾で、葬儀は東海大学の湘南校舎で執り行い、大勢の弔問客が参列してくださった。



1991年9月、創立者松前重義東海大学学園葬を湘南校舎総合体育館で挙行

私への遺言は特になかった。以心伝心、阿吽あうんの呼吸で通じるものは確かにあった。父が世を去って、「大学を背負うんだ」という気持ちがあらためてわいてきた。

母の信子は、父が世を去る1年前の1990年（平成2年）8月22日に逝った。晩年は病気がちだったが、86歳まで生きてくれた。母はまさに「学園の母」だった。敬虔けいけんなキリスト教の信者で、優しく気丈な人だった。母の歌集『桜島』（1977年、私家版）に次のような歌がある。

「学生の悩みを聞きてわが産みし子のごとくにも祈りおるかな」



1990年9月、母・故松前信子東海大学学園葬で献花

母に悩みを打ち明ける若者は多かった。

私も悲しかったが、母の死を一番悲しんだのは間違いなく父だ。父と母は苦難の連続だった激動の昭和を夫婦の固い絆で乗り切った。

母の思い出は数限りなくあるが、よく思い出すのは、故郷の鹿児島島の桜島大噴火の話。1914年（大正3年）のことだ。激しい震動で自宅の塀が崩れたという。この噴火による溶岩の流出で桜島は大隅半島とつながったのだそうだ。

これから

父から受け継いだ学園をこれからどうする

のか。2022年（令和4年）、建学80周年を迎えて、大学をはじめとする学園全体のリニューアルを始めた。学内の英知を集めて、未来に向けた活性化策を立案し、実践している。改革に終わりは無い。

本学園は、公正な国家観、世界観を持った科学人を育てることを目指して建学した。父が技術官僚だから、設立したのは理工系学校だったが、当初から「文理融合」を標榜して名実ともに総合大学に育ててきた。単に文理両方の学部があるというだけではない。理系の学生にも文系の学生にも共通した思想を教えるのが本学の際立った特徴である。それはハードとソフトの融合でもある。

終戦間もない1945年（昭和20年）、総合大学の認可を出す際に作成された「（旧制）東海大学設立要綱」にある「目的」の文言が、その理念を象徴している。

「文化及（および）自然科学の高級使命感を把握し、

歴史哲学の示す民族理想実現の大道を邁進する人材を養成す」（原文は旧字カタカナ）

これまでも書いてきたが、学生それぞれが、歴史観、国家観、世界観を自分のなかに育て、社会に貢献する。そして、世界平和に寄与する人材を育てたい。それが建学以来の精神である。この基本をこれからも堅持しながら、時代の変化に対応したカリキュラムを今後も充実させていきたい。

少子化をはじめ、教育機関をめぐる環境は厳しさを増しているが、この旗は掲げ続けなければならぬ。それが本学園のさらなる成長の礎になる。

2014年（平成26年）に長男の義昭が理事長に就任した。彼もずっと学務に携わってきたので、私とは以心伝心で大学の未来を考えているはずだ。取り立てて引き継ぐ言葉はかけなかった。「ちゃんとやれよ」と言っただけである。

世界の平和を担う若者を育む

私が自伝的な著書である『私の20世紀』（科学新聞社）を上梓したのは、20世紀が終わっ



1989年1月、タイ王国より白象勲章を受章。チャチャイ・チュンハワン首相から授与される

て間もない2001年（平成13年）1月のことだ。この本で私は自らの半生を振り返ったが、あわせて東海大学への熱い思いや、教育への情熱についても書いた。それは、20年あまり過ぎたいまでも微塵も変わっていない。

熱い思いで、地域を、日本を、そして世界をよりよく平和で豊かにするために貢献できる若者を育ててきたと自負している。激しい時代の変化を先取りして学園を柔軟に発展、進化させてきた。この積み重ねが、本学園の誇るべき財産だ。創立者の父、松前重義の後を継いで大学の運営に心血を注いできた私にとって、学園の発展が何よりの喜びであり、生きがいである。

この20年で内外の情勢は劇的に変わり、価値

観の大きな転換が起きた。文明の衝突や宗教間の軋轢もあり、世界の混迷はさらに深まっている。すでに書いたように、人知では解決が難しいさまざまな問題が山積している。

そういう時代だからこそ、「教育の力」が試される。私はそう確信している。思いを致すのは、父の挑戦だ。日本が太平洋戦争に敗れて間もなく、国土は焦土と化し、世の中が大混乱するさなかに、父は、すであつた、2つの専門学校を統合して東海専門学校（のちに東海科学専門学校に改称）とし、1946年（昭和21年）には東海大学へと昇格させた。いまと同じく価値観がひっくり返るなかで、揺るぎのない強い決意の下、持ち前のパワーと実行力で理想の教育の場をつくり上げたのだ。資金不足や人材難など、八方ふさがりのような状況にもひるまずに、熊本出身の父は、「頑固で粘り強い「肥後もっこす魂」で乗り切った。

それから80年、学校法人東海大学は、営々と若者を育成し続けてきた。建学の理念である「文科と理科の融合」は、物質文明と精神文明の融合のこともであると私は考えている。増殖し続け、弊害も目立つ物質文明を高い精神で「ふるい」にかければ、そこに調和が生まれ、難題を解決する糸口になるに違いない。

学生や生徒ひとりひとりが誰からも強制されずに自らの意志に基づいて自主的に学んで、自らを耕すことが何より大切だ。自己形成や思想形成に励み、発想の仕方や課題達成のノウハウなどを身に付けるとともに、まわりの人たちと身を寄せ合い、協力し合い、励まし合いながら学び、育てばいい。

学校法人東海大学のスタッフには、フロンティア精神を忘れずに人間教育をさらに充実させて、難局に手を携えて立ち向かう覇気を持つ若者を日本に、世界に送り出してほしい。半生を振り返って思うのは、そのことに尽きる。

本書の発刊にあたって

学校法人東海大学理事長・副総長 松前義昭

学校法人東海大学の建学以来80年にわたる歴史の第3四半世紀（1992年以降）、いわゆる「展開期」に総長・理事長として学園を背負ってきた松前達郎の人生を振り返る本書は、本学園建学80周年事業の一環として制作されました。

創立者・松前重義の長男として本学園の建学前夜から黎明期をつぶさに見、その後、教員として大学の一員となり、さらには創立者の跡を継いで、国内外に教育・研究機関、付属施設を持つ総合学園の運営を担ってきた著者による記述は、そのまま学園の歴史の証言となるものです。

2017年、学校法人東海大学建学75周年にあたり、私たちは、建学100周年を見据えた総合戦略「学園マスタープラン」を策定しました。この学園マスタープランでは、本書でも述べられている「変えてはならないもの」すなわち学園の使命を明確にし、「学園の

あるべき姿」も明示しています。「地球市民として未来を創造していく人材を育成する学園」(教育)、「人類の恒久平和と福祉の向上に寄与する研究を推進する学園」(研究)、「教育・研究の成果を広く社会へ還元する開かれた学園」(連携)、「多様な人材が対話と協働を通して挑戦し続ける学園」(教職員)と掲げたこの目標が、学園の歴史と伝統に深く根付いたものであることが、本書で紹介されるエピソードからもおわかりいただけるものと思えます。

「学園の成長こそ、我が誇り」と最終章のタイトルにありますとおり、その力を学園のために尽くし、学園とともに歩んできた著者の人生が、建学の精神とともに皆様に伝われば幸いです。

末筆ではございますが、本書の発行にあたりご協力、ご尽力くださいました皆様にかからの感謝を申し上げます。

西暦	和暦	私の歩み		東海大学の歩み	
1951年	昭和26	3月	電気通信省（のちに日本電信電話公社）の電気通信技官に転任	3月	私立学校法施行により学校法人東海大学となる
1952年	昭和27	4月	電気通信省電気通信研究所勤務	4月	東海大学高等学校を静岡県に開校
1955年	昭和30	10月	電気通信部品の耐蝕性亜鉛めっきクロメート処理の実用化により日本電信電話公社総裁表彰を受ける	4月 1月 （渋谷校舎）	東海大学工学部を東京都（渋谷区富ヶ谷）に移転 学校法人名教学園を合併し、東海大学付属高等学校を東京都に開校
1957年	昭和32	4月	東海大学非常勤講師		
1958年	昭和33	12月	電気通信研究所金属研究室研究主任	4月	東海大学付属幼稚園を静岡県に開園
1959年	昭和34	6月	電気通信研究所磁性材料研究室研究主任	12月	超短波（FM）放送実験局「J S 2 A O」放送開始
1960年	昭和35	10月	A・Iワイパーの実用化発明により日本電信電話公社総裁表彰を受ける	4月 4月 4月 4月	東海大学付属高等学校に通信教育部を設置 東海大学工業高等学校を静岡県に開校 東海大学高等学校を東海大学第一高等学校に校名変更 東海実業高等学校を東海大学実業高等学校（1979年）に校名変更
		5月			超短波放送実用化試験局「FM東海／FM・JS2H」（現エフエム東京）を開局

	西暦	和暦		私の歩み		東海大学の歩み
	1966年	昭和41			4月	東海大学政治経済学部を開設（湘南校舎）
	1967年	昭和42			4月	東海大学第五高等学校を福岡県に開校
	1968年	昭和43			4月	東海大学体育学部を開設（湘南校舎）
					4月	東海大学付属小学校を静岡県に開校
					1月	海洋調査実習船「東海大学丸二世」が就航
					4月	東海大学教養学部を開設（湘南校舎）
					4月	東海電波高等学校を東海大学高輪台高等学校に校名変更
	1970年	昭和45	10月	科学技術会議専門委員（1974年7月まで）	5月	東海大学海洋科学博物館（現東海大学海洋学部博物館）を静岡県に開設
					9月	東海大学ヨーロッパ学術センターをデンマーク・コペンハーゲンに開設
	1971年	昭和46	4月	日本対外文化協会常任理事（1980年5月まで）	7月	海洋調査実習船「望星丸」が就航
			4月	社団法人出版文化国際交流会理事・副会長（1987年7月まで）		
	1972年	昭和47	4月	学校法人多摩児童学院（現学校法人菅生学園）理事	4月	東海大学工芸短期大学（1977年より北海道東海大学）を北海道に開学
10月			5月	学校法人東海大学理事（2014年5月まで）		
				東海大学副学長（1975年1月まで）		

		1973年	昭和48	2月	九州東海大学学長（1987年9月まで）	4月	九州東海大学（熊本校舎）を熊本県に開学、阿蘇郡に阿蘇校舎を開設
		1974年	昭和49	7月	学校法人東海福岡学園理事（1995年5月まで）	4月	東海大学付属本田記念幼稚園を神奈川県に開園
		1975年	昭和50	3月	学校法人東海大学情報技術センター所長（1979年3月まで）	6月	自由ヶ丘幼稚園を福岡県に開園
		7月		4月	学校法人芙蓉学園（現学校法人東海大学甲府学園）理事	3月	学校法人東海大学情報技術センターを東京都に開設
		7月		4月	学校法人東海大学熊本学園理事	4月	東海大学医学部を開設（伊勢原校舎）
		1月		4月	学校法人東海大学常務理事（1977年9月まで）	4月	東海大学医学部付属短期大学を神奈川県に開学（湘南校舎）
		7月		4月	学校法人芙蓉学園（現学校法人東海大学甲府学園）理事長（1978年5月まで）	4月	学校法人精華学園（千葉県）と提携（精華女子中学校・高等学校を1975年より東海精華女子中学校・高等学校、1977年より東海大学精華女子中学校・高等学校に校名変更）
		7月		5月	学校法人芙蓉学園（山梨県）と提携（東洋大学第三高等学校を東海甲府高等学校に校名変更）	4月	かもめ幼稚園を熊本県に開園
		11月		2月	学校法人芙蓉学園（現学校法人東海大学甲府学園）理事長（1976年11月まで）	4月	東海大学医学部付属病院を神奈川県に開院
				4月		4月	東海大学付属高等学校を東海大学付属浦安高等学校に校名変更し、千葉県に移転

西暦	和暦	私の歩み		東海大学の歩み	
1976年	昭和51			4月	東海大学総合研究所機構（現東海大学総合研究機構）設置
1977年	昭和52	7月 参議院議員（2001年7月まで）		4月	北海道東海大学（旭川校舎）を北海道に開学
		10月 学校法人東海大学副理事長 （1991年1月まで）		4月	東海甲府高等学校を東海大学甲府高等学校（別法人）に校名変更
1978年	昭和53	6月 文部省日本ユネスコ国内委員会委員 （1979年5月まで）		11月	学校法人一橋学園（山形県）と提携（一橋高等学校を1978年より東海山形高等学校に校名変更）
		11月 科学文明研究集団理事長（1991年12月まで）		11月	海洋調査実習船「望星丸二世」が就航
1979年	昭和54	5月 学校法人東海大学熊本学園理事長 （1992年5月まで）			
		6月 財団法人松前国際友好財団理事			
1980年	昭和55	7月 学校法人東海大学副総長（1991年9月まで）		4月	東海大学付属相模中学校を神奈川県に開校

1985年			1983年			1981年
昭和60			昭和58			昭和56
11月	11月	1月	3月	10月	5月	1月
日本対外文化協会理事	財団法人日本出版クラブ評議員 (1988年11月まで)	学校法人国際武道大学理事 参議院通信委員会委員長 (1985年7月まで)	社団法人日本金属学会評議員 (1997年3月まで)	ハンガリー・ブダペスト工科大学より名誉博士号を授与される ソ連・モスクワ大学より名誉客員教授の称号を授与される	瑞雲書道会理事長 学校法人東海大学甲府学園理事長 (1991年9月まで)	
		11月	4月	6月	1月	
		4月	4月	1月		
	東海大学松前武道センターをオーストリア・ウィーンに開設	東海大学医学部付属大磯病院を神奈川県に開院 東海大学松前武道センターをオーストリア・ウィーンに開設	12月 東海大学医学部付属東京病院を東京都に開院 4月 自由ヶ丘幼稚園を東海大学付属自由ヶ丘幼稚園に園名変更 4月 高等学校を東京都に開校 4月 学校法人多摩児童学院と提携、同法人が東京菅生高等学校を東京都に開校	6月 東海山形高等学校を東海大学山形高等学校(別法人)に校名変更 1月 学校法人東海大学の機関として望星学塾を東京都に開設		

西暦	和暦	私の歩み	
1986年	昭和61	7月	社団法人日本原子力産業会議顧問
1987年	昭和62	4月	東海大学学長(1991年10月まで)
		4月	東海大学ヨーロッパ学術センター所長(1988年3月まで)
		6月	ハンガリー人民共和国より「星光章」を受章
		8月	社団法人出版文化国際交流会会長
		9月	東海大学宇宙情報センター所長(1990年3月まで)
		11月	オーストリア・ウィーン州より「ウィーン州大栄誉金章」を受章
		11月	ソ連・モスクワ大学より名誉博士号を授与される
1988年	昭和63	7月	参議院産業・資源エネルギーに関する調査会会長(1989年6月まで)
		12月	ソ連・科学アカデミー(現ロシア科学アカデミー)外国人会員
		4月	東海大学第四高等学校付属中等部を北海道に開校
		4月	東海大学法学部を開設(湘南校舎)
		4月	東海大学精華女子高等学校を東海大学付属望洋高等学校に校名変更
		4月	東海大学平和戦略国際研究所を東京都に開設
		11月	東海大学宇宙情報センターを熊本県に開設
		8月	第1回アジア・環太平洋学長研究所長会議を東京都で開催
		4月	東海大学付属デンマーク校(高等部・中等部、1993年から高等部・中学部)をデンマーク・プレストに開校
		4月	東海大学付属浦安中学校を千葉県に開校

		1989年	平成元	1月	タイ王国より「白象勲章」を受章	4月	東海大学付属望星高等学校熊本県に開校
		1990年	平成2	3月	学校法人国際武道大学評議員（現在に至る）	4月	東京菅生高等学校を東海大学菅生高等学校（別法人）に校名変更
		1991年	平成3	8月	東海大学ホノルル校校長（1991年2月まで）	4月	東海大学福岡短期大学を福岡県に開学
		8月		8月	韓国・漢陽大学より名誉法学博士号を授与される	4月	東海大学付属望星高等学校北海道校を北海道に開校
		8月		8月	母・信子が逝去	4月	東海大学高輪台高等学校を東海大学付属高輪台高等学校に校名変更
		10月		10月	タイ・モンクット王工科大学より名誉博士号を授与される		
		1991年	平成3	1月	学校法人東海大学理事長（2014年5月まで）	2月	東海大学パシフィックセンターを米国ハワイ州ホノルルに開設
		8月		8月	父・重義が逝去	4月	東海大学開発工学部を静岡県に開設（沼津校舎）
		9月		9月	学校法人国際武道大学理事長（2012年3月まで）	4月	東海大学付属望星高等学校福岡校を福岡県に開校
		10月		10月	学校法人東海大学総長（現在に至る）		
		11月		11月	学校法人東海大学望星学塾塾長（現在に至る）		
		11月		11月	東海大学平和戦略国際研究所所長（1998年3月まで）		

	西暦	和暦		
1994年	1991年	平成3	11月	財団法人松前国際友好財団理事長 (1997年5月まで)
平成6			11月	日本対外文化協会会長代行 (1993年5月まで)
5月	5月	4月	12月	財団法人首都大学野球連盟会長
			12月	東海大学松前武道センター(ウィーン、現地法人)理事長
			1月	社団法人スウェーデン社会研究所会長(2000年3月まで)
			6月	財団法人日本武道館顧問(1995年5月まで)
			8月	参議院環境特別委員会委員長 (1993年8月まで)
	1993年	平成5	2月	デンマーク王国より「ダンネブロー勲章勲一等ナイト章」を受章
			4月	ロシア国際高等教育アカデミー名誉会員
			5月	日本対外文化協会会長(現在に至る)
			5月	ブルガリア共和国ソフィア工科大学より名誉博士号を授与される
			10月	東海大学産業科学研究所を東海大学総合科学技術研究所(現東海大学総合科学研究所)に改組(湘南校舎)
			10月	東海インターナショナルカレッジ(現ハワイ東海インターナショナルカレッジ)を米国ハワイ州ホノルルに開学
			10月	海洋調査研修船「望星丸」が就航

私の歩み

東海大学の歩み

1995年	平成7	3月	ブルガリア共和国聖キリル・メトディオス国際財団理事	4月	東海大学菅生高等学校付属中学校（別法人）を東京都に開校
1996年	平成8	6月	株式会社科学新聞社会長	4月	東海大学付属仰星高等学校中部を大阪府に開校
		9月	タイ王国より「ディレクナポ勲一等最高勲章」を受章		
		11月	ロシア科学アカデミー極東研究所より名誉博士号を授与される		
		11月	ロシア自然科学アカデミー外国人会員（現在に至る）		
1997年	平成9	10月	東海大学パシフィックセンター理事長	4月	東海大学菅生高等学校付属中学校を東海大学菅生中学校（別法人）に校名変更
		11月	ブルガリア共和国より「勲一等マダルスキー・コニク最高勲章」を受章		
1998年	平成10	2月	財団法人全日本大学野球連盟会長	4月	東海大学教育開発研究所を東京都に開設
1999年	平成11			4月	東海大学付属翔洋高等学校（東海大学第一高等学校と東海大学工業高等学校を統合）を静岡県に開校

	西暦	和暦			
	2000年	平成12	2月	財団法人日本学生野球協会会長	
	4月	東海大学学長(2003年9月まで)			
	4月	東海大学現代文明論研究センター所長 (2013年3月まで)			
	4月	財団法人全日本大学野球連盟顧問			
	6月	ハワイ東海インターナショナルカレッジ理事長			
	11月	日本政府より勲一等瑞宝章を受章			
	2001年	平成13	5月	ブルガリア科学アカデミーより「マリン・ドリノフ賞」を授与される	
	5月	財団法人日本高等学校野球連盟最高顧問			
	6月	日本ブルガリア協会会長			
	2002年	平成14			
	2003年	平成15			
	2004年	平成16	1月	日本武道協議会より「武道功労章」を受章	
2月					
瑞雲書道会会長					
	4月		4月	東海大学現代文明論研究センターを東京都に開設	
	4月		4月	東海大学エクステンションセンターを東京都に開設	
	3月		3月	東海大学電子情報学部を開設(湘南校舎)	
	4月		4月	東海大学医学部付属八王子病院を東京都に開院	
	4月		4月	東海大学第一中学校を東海大学付属翔洋中学校に校名変更し、東海大学付属翔洋高等学校内へ移転	
				東海大学かもめ幼稚園を東海大学付属かもめ幼稚園に園名変更	
				東海大学専門職大学院実務法学研究科を開設(渋谷校舎)	

私の歩み

東海大学の歩み

		2007年 平成19		2006年 平成18		2005年 平成17				
10月	6月	6月	6月	5月						
東海大学学長（2009年5月まで）	全日本アマチュア野球連盟名誉会長（2009年5月まで）	オーストリア・国際シユンペーター学会より「2007年度シユンペーター賞」を授与される	財団法人日本科学技術振興財団評議員	ロシア連邦より「友好勲章」を受章						
		4月	4月	4月	4月	4月	4月	4月	4月	4月
	校	東海大学付属高輪台高等学校中等部を東京都に開	東海大学電子情報学部を東海大学情報理工学部に名称変更（湘南校舎）	東海大学に連合大学院（九州東海大学と北海道東海大学との連合）を開設	東海大学第四高等学校付属中等部を東海大学付属第四高等学校中等部に校名変更	東海大学第五高等学校を東海大学付属第五高等学校に校名変更	東海大学第四高等学校を東海大学付属第四高等学校に校名変更	東海大学第三高等学校を東海大学付属第三高等学校に校名変更	東海大学第二高等学校を東海大学付属第二高等学校に校名変更	

	西暦	和暦		私の歩み		東海大学の歩み
	2008年	平成20		4月 九州東海大学学長（2009年9月まで）	4月	東海大学・九州東海大学・北海道東海大学を統合、連合大学院を東海大学大学院に移管
	2009年	平成21		5月 全日本アマチュア野球連盟会長	4月	東海大学付属翔洋中学校を東海大学付属翔洋高等学校中等部に校名変更
	2010年	平成22		2月 公益財団法人日本学生野球協会名誉会長 2月 全日本アマチュア野球連盟名誉会長 (2013年3月まで)	4月	東海大学観光学部を開設（湘南および渋谷校舎）
				4月 北海道東海大学学長（2009年9月まで）	4月 4月 4月 4月	東海大学総合経営学部（熊本校舎）、国際文化学部（札幌校舎）、情報通信学部（高輪校舎）、芸術工学部（旭川校舎）、産業工学部（熊本校舎）、生物理工学部（札幌校舎）、農学部（阿蘇校舎）を開設 東海大学付属浦安中学校を東海大学付属浦安高等学校中等部に校名変更 東海大学付属相模中学校を東海大学付属相模高等学校中等部に校名変更 東海大学菅生中学校を東海大学菅生高等学校中等部（別法人）に校名変更

2012年	平成24	3月	ブルガリア共和国より「聖キリルと聖メトディ勲章」を受章	4月	清水校舎に幼稚園から大学院までの完全な一貫教育体制整う
2013年	平成25			4月	東海大学生物学部を開設（札幌校舎）
2014年	平成26			4月	東海大学付属第二高等学校を東海大学付属熊本星翔高等学校に校名変更
2015年	平成27			4月	東海大学経営学部、基盤工学部を開設（熊本校舎）
				4月	東海大学甲府高等学校を東海大学付属甲府高等学校（別法人）に校名変更
				4月	東海大学パシフィックセンター、ハワイ東海インターナショナルカレッジを米国ハワイ州カポレイに移転
				4月	東海大学付属翔洋高等学校を東海大学付属静岡翔洋高等学校に校名変更
				4月	東海大学付属翔洋高等学校中部を東海大学付属静岡翔洋高等学校中部部に校名変更
				4月	東海大学付属幼稚園を認定こども園東海大学付属幼稚園に移行
				4月	東海大学付属本田記念幼稚園に移行
				4月	東海大学付属かもめ幼稚園を認定こども園東海大学付属かもめ幼稚園に移行

西暦	和暦	私の歩み	東海大学の歩み
2016年	平成28	2月 一般財団法人首都大学野球連盟名誉 会長	4月 東海大学現代文明論教育研究機構を設置
2018年	平成30		4月 東海大学付属第三高等学校を東海大学付属諏訪高等学校に校名変更
			4月 東海大学付属第四高等学校を東海大学付属札幌高等学校に校名変更
			4月 東海大学付属第五高等学校を東海大学付属福岡高等学校に校名変更
			4月 東海大学付属望洋高等学校を東海大学付属市原望洋高等学校に校名変更
			4月 東海大学付属小学校を東海大学付属静岡翔洋小学校に校名変更
			4月 認定こども園東海大学付属幼稚園を認定こども園東海大学付属静岡翔洋幼稚園に園名変更
			4月 東海大学付属自由ヶ丘幼稚園を認定こども園東海大学付属自由ヶ丘幼稚園に移行
			4月 東海大学文化社会学部、健康学部を開設（湘南校舎）
			4月 東海大学付属仰星高等学校を東海大学付属大阪仰星高等学校に校名変更
			4月 東海大学付属仰星高等学校中等部を、東海大学付属大阪仰星高等学校中等部に校名変更

2019年	令和1	10月	ブルガリア共和国大統領より「大統領栄誉賞」を授与される
2022年	令和4	4月	東海大学工学部電気電子工学科教授 (現在に至る)
2023年	令和5	4月	東海大学児童教育学部(湘南校舎)、経営学部(湘南および高輪校舎)、国際学部(同)、建築都市学部(湘南校舎)、人文学部(清水校舎)、文理融合学部(熊本校舎)を開設 東海大学阿蘇くまもと臨空キャンパスを開設

(校舎の表記は2022年現在)

【著者紹介】

松前達郎（まつまえ・たつろう）

1927年長崎県に生まれる。東北大学工学部卒業後、電気通信省（現日本電信電話株式会社）電気通信研究所で研究に従事。工学博士。

61年より東海大学助教授、63年同教授、77年より参議院議員（2001年7月まで4期）、91年1月より学校法人東海大学理事長（2014年5月まで）、同年9月より学校法人国際武道大学理事長（2018年5月まで）、同年10月より学校法人東海大学総長に就任。現在に至る。

公益財団法人日本学生野球協会名誉会長、公益財団法人日本高等学校野球連盟最高顧問、日本対外文化協会会長・理事長などを歴任。

勲一等瑞宝章。デンマーク王国、ロシア連邦、ハンガリー、ブルガリア共和国など各国より勲章を受章、名誉博士号を授与される。著書に『電気材料』（共著）、『ある日のヨーロッパ』『未来への転換 曲がり角にたつ日本』『防衛の限界』『私の20世紀』など。

希望を星につなげ 我が人生

2023年7月20日 発行

著者 松前達郎
© Tatsuro Matsumae, 2023

発行 株式会社日経BP
日本経済新聞出版
〒105-8308 東京都港区虎ノ門4-3-12

装丁 三木和彦

印刷・製本 三松堂株式会社

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害になります。その場合は、あらかじめ小社あてに許諾を求めてください。

Printed in Japan

